歩行者

鷹崎徳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
歩行者

【Ｎコード】
Ｎ１７２３Ｎ

【作者名】
鷹崎徳

【あらすじ】
歩くことが好きな佐々木一馬。色々な人と交流を交わしながらある日、その人達と世界各国を歩きたいと考え始める。多くの人の反対や興味を集めながら一人また一人集め、やがて自分含め五人メンバーを集わせて各都市の国立公園、大都市を歩く。

一章～始まりの話～　プロローグ　（前書き）

初めまして作家志望の鷹崎徳と申します。今回が初投稿です。初心者なので、誤字脱字などある可能性があるかな？　あったらご指摘お願いします。

縦読みでお願いします。

作品は、名前の通り（歩行者）歩くことがメインです。主人公が歩き仲間を集めて、楽しく、厳しく目的地に向かっていく・・・てな、感じです。

長期連載の予感がきますが、読者の方々が飽きないように全力を出します。

どうぞ、楽しんでください。

一章〜始まりの話〜　プロローグ

歩く。
行きたいところ目指して歩く。
ただひたすら歩く。
必要最低限の荷物を赤色のリュックに入れ、東や西、北や南を縦横無尽に歩き続ける。
――ただ歩く。

俺、佐々木一馬は歩くのが好きだ。
小学校の時から車送迎など一度も求めず中学、高校ともに一度も自転車で登校したことがない。自分の足で行き来していた。
そのお蔭で足腰は丈夫になり、大学では長距離歩行のサークルに入って更に歩くことにのめり込んで行った。
そして、大学も無事に卒業。一般的な流通関係の仕事にありつき、営業をやっている。まさに、自分の足で稼ぐだ。
学生時代と違って残業や休出、リズムよく長距離歩行の練習はできないけどその合間をぬって練習を続けている。
ゴールデンウィークや盆休みなどの長期休暇の時、歩いて旅行に行く為だ。
それに、歩いてる間は嫌なことを忘れる。俺だって悩みぐらいある。
ええっ！　嫌なこと思い出した。歩いて忘れるに限る。
こうして、俺は今日も寝る前に赤色のリュックに重いものを大量に詰め、町内一周するために一人暮らしの部屋から出て行った。

残業あとであって練習は夜遅くになってしまう。
常に気を付けないと何が起きるかわからん。このご時世だから。

街灯が常に点いている道や、人通りが夜中前でもある駅前通りを選んで夜中の練習に使っている。今日は駅前通りにする。
駅前通りは、都内に通勤通学する人が住むベットタウンだ。一戸建てよりも団地やマンションなどが多い。縦長の建物が所狭しと群をなしている。
サラリーマンや、学生がまだ見受けられる。たぶん俺と同じ残業を済ましたんだろう。学生は塾か、まだそれ以外か、まぁ俺には関係ないことだが。と、見ながら思う。
日頃の一つの風景だから。

駅に着いた。
現代的な造りで、線路を跨ぐ形で二階に自由通路が設けられていて、歩行者なら料金払わないで線路を越えられる。それに、各所にガラス窓が張り巡らせて構内町周辺が見回せるようにできている。しかし、この町に駅から見て喜ばせる風景などここにはない。人が住むのがせいぜいだ。
ましては特急など・・・まぁ、移動に関して利便性は最高だか良いか。
無駄に突っ込みいれても疲れるだけだ。歩くことに集中しよう。

ロータリーを半周したときだ。聞きなれた唄声が響いてくる。

またアイツか。相変わらず毎日歌えるものだ。
最近、不思議な奴と話し相手になった。駅の出入口に、毎晩大体二十一時から二十三時ぐらいに現れ、自分で作詞作曲した曲を・・・ギターの語り弾きなら良かったものをヘンテコな機械に演奏させ、それで唄を歌うのだ。奇人変人極めたり。通報されそうになったのを助けたのが運のつき、それ以来俺のことをアニキと言い慕い始めた。
言い遅れたが奴の名前は鮫島幸一と言い、ミュージシャンを目指

してるわけではなく、機械か、プログラム関係を目指しているそうだ。高校生だ。
「アニキ！　今日も歩いてるですか」
小型音響装置から優しく、俺をいつも呼ぶ声が聞こえてくる。――マイクの電源入れっぱなしで話すな！　それに目立たないようにしていたが、気付かれてしまった。なんて視力だ。
「・・・そうだ。何で気付いた？」
「なんて・・・言ったて、同じリュックですよね。それに、大体同じ時間に現れますし・・・無理です」
そうだった。迂闊だった。それじゃ、誰だって気付く長い経験が仇になってしまった！
「だよね。俺が悪かった。今からそっちに行くから、機械たちの演奏止めて」
「わかりました」
最近流れてる感じの音が止まる。歩くこと以外は疎い俺には分からないが、たぶんだと思う。

「ようこそ、ロボ演奏会へ。試作機Ｕ－０２です、最近ギター系統のプログラムを入れ込んで弾けるようになったんですが・・・、」
幸人の演奏会場となっている場所に立ち寄ると、同時に本人が開発した機械とプログラムの説明会になる。大概・・・。
「行動プログラムにかなり負荷がかかりまして、三歩行くと止まってしまうんです」
ほぼ反省会だ。
「残念だったな。そううまく行くものじゃないだろ」
「・・・ううっ、今度こそっと思ったのに。悔しいな」
「頑張れ・・・てっ、だんだん似てきてないか？　例のロボに」
「Ｃ－３ＰＯですか？　気のせいですよそんなよそ様のロボなんかマネなんて、俺のロボの方が最近な感じがしませんか」
うーん、似てる気がするがたぶん映画の見すぎだろう。引っかか

るが、気にするほどじゃないから気にしないことした。
「ならそうだな。分かった」
てな感じでほぼ毎晩繰り返している。だんだん日課になりつつあることにうん？　と思うことがあるがそう悪いものじゃないから、休憩場所として立ち寄る。
「わかればいいですよ。それよりも大丈夫ですか、練習、結構休憩してるみたいですけど・・・」
あっ！　幸一の一声で腕時計を見る。短い針が十一に傾き、長い針が十を越えていた。
「悪い。俺帰らないといけない、明日も仕事だ」
喋りなが馬鹿に重いリュックを持ち上げ、幸一に背を向ける。
「そうですか、それじゃおやすみなさい」
最後まで聞きてやれなかったが、こっちも忙しい、許せ。無理やり走りながら思う。

最後はマラソンになってしまった。明日筋肉痛にならないといいが、怖いな。必死に、入念にストレッチをこなし、明日に疲れを残さないようにするが、不安が消えない。
明日地獄だろな・・・寝よう。
悶え苦しむ明日を想像しながら軽くシャワーを浴び、寝ぐせの気にもせづ布団に入り、そのまま床についた。

一章～始まりの話～　プロローグ　（後書き）

スミマセンいきなり脱線な内容になりました。でも、主人公が歩くのが好きだということは伝えられたのが幸いです。もしかしたら改稿していくかもしれないので、そのときもよろしくお願いします。

歩行者１（前書き）

二度目の投稿です。まだ内容はそれ気味ですが、お試しと実験を行ってるためお許し下さい。
基本的に私は、王道じゃなく、新しい物語を作っていきたい所存です。
楽しんでくれたら救いです。

歩行者1

案の定両足が痛い。
仕事に支障はないけど気持ち的に苦しい。休みたい。
しかし、休んだら休んだだけ後々金銭的に、居場所的に苦しくなる。
布団に包まれながら両方の気持ちを天秤にかけて、どっちをとるか究極の選択に挑むが・・・すでに答えは決まっている。
「よし、起きよう」
俺自身に掛け声を出して、だるい体を強引に起き上がらせ、化粧台へと足を向かわせる。鏡にひどい形相をしている俺が写り、グチャグチャの髪形、酷いの一言だけじゃすませられない俺が居た。
間違いなく、昨日のマラソンと、連日のハードワークがついに俺を本格的に襲い始めているのを実感せざるおえない。しかし、先と同じように休む訳にはいかない、ましてはこんな顔で営業に行かないといけないなんて・・・今日は惨敗の予感がする。

◇　◇　◇

アニキから別れて次の日。俺は朝から学校、俺の机で顔を隠しながら寝ていた。
もう何時から寝て、何時まで寝たのかもうわからなくなった時、ふと身近な人の気配を感じた。
「幸一！　お～い、聞こえてますか？」
・・・一応恋人の広美が叫んでいる。怒鳴らなきゃ可愛いけど、こうもうるさいとな・・・。
とりあえず寝たふりをかまして、昨日の失敗を思い出す。
確かギタープログラムを停止させただけじゃなくって、歩行用のプログラムまで停止させて、復旧不能させてしまって、俺が担いで

帰るはめになったんだ。機械本体と諸機材合わせて総重量五キロ。初めて朝帰りさせたのは広美じゃなく、こんな無機物のロボに・・・不甲斐ない。起きたくない。

そんな思いを彼女には教えてない。揺さぶる動きが激しくなる。このままじゃ痛い思いしないとけなくなる気がする。覚悟を・・・。

ゴン！　頭に鈍い音と、鋭い痛みが広がる。広美が拳骨したんだ。痛い！

これは一刻を争う。二打目が来る前に――！

勢い任せに顔を上げ、広美と目を合わす。

「！」

不意に顔を上げたことに広美は驚き、二歩下がり、俺が察した通り二打目の拳骨を食らわせよとしていた右腕のやり場に困る。

「起きました。いい一撃でしたよ」

「一撃出す前に起きて。また皆にからかわれちゃう」

「別に問題ないだろ？　もう付き合ってるだから。付き合う前とか、付き合いたくない人とじゃ、からかわれたく無いけど・・・なっ」

と言い返す。

「・・・確かにそうだけど。普通の・・・」

「どの基準？　普通、バカップル。よく分からないことを出してくる連中なんて、無視すればいいのに。俺たちは俺たち」

「・・・はぁ、つまらない考え」

口調だけじゃない、表情でもあからさまに分かるように言う。本当につまらなさそうだ。呆れてる。

「・・・ゴメン。昨日ちょっとあって、今日はいつも以上に調子悪くて、気分を悪くして・・・ゴメン。本当に・・・」

場の空気が最悪になる前に慌てて謝る。何時もなら俺の冷たい言葉も簡単にスルーして自分の話を始めるのに、今日は違う。何かが違う。ロボ馬鹿の俺でも分かる。

言葉に添えて両手合わせ、広美に向ける。

「・・・・・」

何も喋らない。表情も変わらない・・・。
最悪な予感が頭によぎった瞬間、広美の口が開いた。
「何があったの？」
「・・・えっと。アニキと話終わって、俺も帰ろうと思ってバクにかかっていたロボのプログラムを書き換えたら・・・全部消えて、復旧させる奴でもダメな程の重症で・・・結局、自力で持ち帰って朝帰り。寝る暇もなく登校、今現在ダウン中に広美の拳骨を食らって説教を受けてる次第でございます」
チャンスとばかりに昨夜のこと全部言った。言い方や、丁寧な言葉など無視して徹底的に・・・。
「・・・やっぱり、そんなことだと思った。そんなことがあったら私のケータイに連絡してと、何度も言ってるでしょ。もう！　幸一のロボって、そんなトラブルばっかでしょ！」
ごもっとなことを言われる。でも・・・。
「彼女にそんなことさせられるわけないだろ。そもそも、夜中じゃないか。危険だろ」
「それはお互い様よ。現にも、警察に通報されそうになったじゃない。そのアニキさん・・・いや、佐々木さんに助けてもらって・・・とにかく、連絡して。関係な人まで巻き込まないで」
「・・・御もっともです。その時はよろしくお願いします」
こういう時、女が強い。それは歴史が証明してるし、目の前でも証明された。終始頭を下げるが一番。しかし、心配されてると思うと、心と言われてる場所が苦しくなる。少しは自重した方がいいかと思う。
一応心配してくれる人がいる以上。
「それでよろしい。じゃあ早速今夜、幸一の演奏会行っていい？そのことを話そうと思って、来たんだけど・・・寝ていていたから話それちゃったけど」
・・・・えっ？　なんだって！　あんな恥ずかしい演奏会を見に、聞きに行きだと。ダメだ。

断ろうと身構えようとしたが、今までで最高の笑顔をしていて、俺が気に入って広美に着けさせようとした白いカチューシャを装着してるのを今気付いて、「来るな！」など言えるほど、俺は強くなかった。だって・・・可愛いんだ。

◇　　◇　　◇

「死相出てるよ佐々木さん」

全身から放たれているい痛み耐えながら早五時間。同期で、隣のデスクでノートパソコンで作業している一之宮さんに指摘を受ける。ショートの黒い髪が印象的で何でもできる女性。同じ年なのに、俺よりも高く評価されてる。

「そうっ？　出てる」

「ばっちりと」

ああっ！　せめて彼女だけには気付かれたくなかった。

「昨日無理して歩いたんでしょ。今日営業なくて良かったね。私なら、アポとってもそんな話してないといって、門前払いする。そんな顔してる人と仕事の話したくない」

傷つくことを平気で口にする。

「・・・・」

「何か喋れ。心配してやってるのに、まるで私がイジメているみたいじゃないか。株を落とすようなまねはするな」

そんなこと言うような奴が心配してるなど思うか。それにお前に心配される筋合いは無い。余計なお世話だ。

嫌なことの九割近くが彼女だ。

「・・・ったく。こっちが好意に接してるのに、その態度はないな・・・も少し私をみろ」

聞き違いか？　今好意と聞こえた気がした。

「今好意と言ったか？」

「・・・そこは反応するんだな。興味あると見た」
引っかかったなと言いたそうな、企みを秘めた嫌らしい笑顔で俺を見る。初夏なのに、エアコンも節約モードでそんなに涼しくないのに、身体全体から床冷えに似た寒気が、いや最悪の悪寒が出てきた。
地雷踏んだか？　そうとう高い確率で踏んだんだ。
「・・・何が言いたいんですか？　一之宮さん」
「言った通りだ。折角だから、改めて言わせてもらおう。私一之宮美幸は佐々木一馬に絶対的信頼をよせてる。好意だ。だからこの時間をもって、結婚前提にお付き合いさせて下さい。以上」
「・・・・」
この状況に対して俺は何て言えば良いんだ？　仕事場で俺が苦手な女性にプロポーズを受けた。何の身構えも出来ずに。今まで好意みたいなこと言われてないし、されてもないのに・・・今、好意と言われて、挙句の果てにプロポーズ。ありえない！　絶対にありえない。
脂汗が出てくる。俺が思ってる以上に焦っている。
理性どころか、本能も追いつかん。
「返事はいつでもいい。君を私以上に好意を持つ女性が現れたら潔く諦めよう。現れたらの話だが・・・。滑り止めとして見てくれ」
頭が真っ白になりかけてとたん、今度は自信ありげに笑う。ように、この俺を好きになるような奴は私以外に現れない。私しか居ない――。
屈辱にも俺はこの時間をもって一之宮美幸に拾われたことになった。
最悪だ！
「お前に拾われる筋合いは無い！」
「静かにしろ。佐々木」

井上課長が静かな怒りを込め、俺を睨む。何時もなら空気みたいにあまり存在を出さないがここぞの時は、計り知れないパワーだす人だ。
「す、すみません」
「以後気を付けるように・・・・おめでとう」
課長のデスクまで結構距離あるけど・・・聞こえていたみたいだ。
会社で、社会的な死を迎える。これで、今後仕事がしずらくなる・・・。
「責任とって。一馬さん」
とどめを刺すように、一之宮さんが言う。
そして一瞬だが、一之宮さん以外の全員の視線が俺に集中した。
完全に最悪だ！

◇　　◇　　◇

ウィー。ウィー。ウィー。と、不思議な機械音を響きだしながら歩く俺のロボＵ－０２と広美と俺。完全におかしな一団だ。変な物を見るような視線が格段に多い。さき、家族ずれの男の子が「あれ何？」とお父さんと、お母さんに聞いていたが「見ちゃダメ」と、男の子の目を手で隠しながらお父さんが抱え逃げて行った。
――あそこまで露骨にやるかよ。かなり萎えた。
でも広美はそんなことを気にせず。俺に色々な話題を聞かせ俺に微笑みを見せてくる。
「よく作れたわね二足歩行のロボ。これ結構難しくない？」
学校のことや、最近できた新しい雑貨屋の話から急に俺のロボの話になった。
「組み立てはそう難しいものじゃない。しかし材料調達や、組み立てまの設計が難しい。部品は親父の工場で、昼勤から夜勤に代わる一時間の間だけ作ることができるからいいけど・・・あとは根気だな」

「工場って、機械動かせるの？」
目を見開いて俺を見る。
「当たり前だろ。それぐらい動かせなきゃロボなんて作れないし、ましてはプログラムなんてな・・・記憶がない頃から工場で遊んでいたから、ある程度の動かし方や、設定などできる。
俺がよく行く溶鉱炉担当の班長に、一気に出世できると言われたし、板金の方も俺のこと高く評価してくれたからな・・・」
「何気にすごいこと言ってるの！　起用すぎるわよ」
両手をばたつかせ驚きと、困惑した顔で俺を見る。そんなにすごいことなのか？全然思わない。
俺の親父はこの町で一番大きな工場を運営していて、各方面の工場部品提供や、車のフレーム板金など引き受け。大きな評価を受けていた。
家は金もちで、裕福な暮らしをしていた。
そのせいか、一般的な小学校、中学に通っていたけど誰も友達はできなかった。高く見られ、別格扱いされていた。
だから俺は工場で遊び始め、最初は危ないから近づくなと怒られていたけど機械の操作を覚え、お手伝いとして働き、工場で動くロボットアーム等に魅せられていた。
気付けば、ロボつくりに没頭していたから・・・それだけ。
「別に。大したことじゃない。俺の遊び場だから」
広美は、そう・・・っ言い、まだ聞き足りないような、不満が残る言い方でいう。このことを話すのはまだ先だから、許してほしい。

どうこうしてる間に、駅にたどり着く。
いつもの場所にロボを置き、俺の正面に簡易椅子を置き、広美を座らせる。
ここから本番だ。
Ｕ－０２の胸にある入力装置にＵＳＢケーブルをさし、手持ちのノートパソコンからプログラムを入れようと立ち上げた時だ。

「キャッ！」
と広美が叫んだ。
何事だと、後ろを振り向き広美を見る。
震えながら俺に指を指している・・・ように見えたけど、目線が俺よりも奥を見ている。俺の背後に何かいる！
「さ・ち・い・ちぃ・・・・！」
唸る声で俺を名前を呼ぶ！　恨まれることしました？
勇気を振り絞り、勢い任せに後ろを振り向いた・・・・！
「アニキ！」
広美を怖がらせたのは、幽霊じゃなかった。俺を助けてくれた佐々木さんだ。
しかし、昨日とはうって違ってにも死にそうな顔をしている。それに白いシャツ、クールウィズ、仕事上がりだとわった同時に酒臭い。何があった。
「・・・えっと！　この人が例のアニキさん」
怖がっていた広美。俺がアニキと言ったとたん正気に戻り、一気に状況を理解し、駆け寄ってきた。
「そっ、そうだけど・・・今日はいつも以上におかしい」
二人ですこし混乱してる最中、アニキがさらに唸る。

「春と冬が一気に来た！」

意味の分からないことを叫んでアニキは落ちた。
このまま放置するわけにはいかず、目を覚ますまでここに二人で止まることにした。

歩行者1（後書き）

本当にそれました。急なプロポーズ申し訳ありません。ですが、これが王道を行かないと決めた自分の覚悟です。全キャラ上手に配置できるように頑張ります。

最後に、週一投稿を目指します。仕事上時間が取れません。よろしくお願いします。

歩行者2（前書き）

三話目をお送りします。今回は幸一視点です。心労の一馬に対して二人はどう動くか・・・。

歩行者2

アニキが倒れて一時間が経過した。
その間何か恐ろしい夢でも見ているみたいに「うー！」とか「止めてくれ！」を幾度も連呼、俺と広美は異様な不安にさいなまれ続けた。勘弁してくれ。
「広美、無理して残らなくても良いよ。俺が、アニキが起きたら連れて帰るから」
時計は二十二時を回っていた。
夜間徘徊の汚名を広美につけたくない思いで言う。
「気にしないで、無理言ってきたんだから最後まで付き合わせて。それに佐々木さんと話したいことあるし」
笑顔で言い返す。
「・・・ったく、何時になっても知らないぞ」
と言うものの。勝手に意味の分からないことを、わめいて寝てしまった酔っ払いが起きるまで一人で待つのもつまらないし、俺一人と酔っ払いとロボ・・・通報される要因すべてそろっているが、広美がいるだけで状況は少しは良くなる気がする。
「ありがとう」
「どういたしまして」

それからさらに十分後。
何度も冷たい視線さらされながらも耐え、死んでる可能性も出てくるこの酔っ払い。正直苛立ち始める俺たち。いい加減起きないものかな？
「・・・幸一。ロボに殴らせれば、起きるかな」
「・・・当たり所によればな。しかし、コイツにはロボット三原則が・・・」

「そんなもんないでしょ。それとも置いていく？　隣町でおやじ狩りあったけど」
苛立ち始めてるのか、それとも冗談で言ってる？　駅の入口におやじ狩り多発と書かれているポスターに自然に目が行く。まだ犯人捕まっていなくて、集団だって聞くし・・・。
「起こそう。ロボじゃなく、俺たちの手で」
先の良い雰囲気はどこに行った。長丁場を決め込むと思った気持ちはどこだ。
悔やんでも仕方ない。
スーッ、スーッといびき出しながら寝ているアニキ、佐々木さん。俺と広美一気に立ち上がり、彼の胴体シャツを掴み勢いに任せ上下左右に動かす。
「起きてください！　明日仕事遅刻しますよ！」

「――遅刻！」

死人が目を覚ます中国ホラー映画のキョンシー如く、目を覚ますアニキ。よほど遅刻が怖いのだろう、正気を失いかけ、目線が入り乱れている。
「きゃっ！」と大きく叫び思いっきり逃げ出した広美。無理もない。俺でもマジ怖い。てか、俺の彼女になんてことしてくれんだ！
恐怖から一転怒りに変わり、アニキの顔面に右ストレートを食らわした・・・。
「ぐッ？」
と、声かどうか分からない一言いい放ち、俺の正面。アニキにとって後方に倒れて行った。
「俺の広美に・・・・しっ、しまった。アニキ大丈夫ですか！」
アニキをノックダウンさせた同時に、目を覚ます。
一気に身体全体から熱が消え、今度は恐怖と後悔が身体全体に広がり始める。なんてことしてしまったんだ。俺は、犯罪者に・・・。

「遅刻ですよ佐々木一馬さん」
罪に苦しむ俺を無視して、伸びてるアニキに遅刻と言う単語を混ぜて広美が言う目覚めの呪文じゃあるまいし・・・！
「遅刻！　起きなくては！」
目の焦点が滅茶苦茶のまま倒れた人間とは思えぬ回復力、本当に俺の一撃で倒れたのか信じられん。人間じゃない！
理解を越えた事態に更に混乱する俺を、更に無視して、広美は遅刻という目覚めの呪文で気絶を解かれ、更に正気を失いそうなアニキに近づき一言。
「お目覚めよろしでしょうか？」
「当たり前だ！　遅刻しそうなんだぞ！」
「それじゃ、時計を見ないといけませんね。正確な時間の確かめないと」
「おう！　ありがとう・・・・・？　うん？　日付が変わってない？　これは一体何が起きたんだ」
「それは佐々木さんが寝てから一時間弱しか経っていないからです。起こすための口実です」
パニック寸前の佐々木さんを簡単に治めた。
状況を飲み込めず、ハトに豆鉄砲食らったように呆然と広美を見ながら、何か関考えている。
――三分ほど沈黙が続き、この状況を理解したアニキが先に動く。
「ああっ！　思い出した。先までヤケ酒飲んでいて、気付いたら部屋の近く駅の改札抜けてて、女の子を連れて来ている幸一を見つけて・・・・ここからは思い出せない。許してくれ」
広美に頭を下げるアニキ。
「いえいえ。気にしないで下さい」

「そうだ。気にしないで」
と、視線を下げている間に平然と広美の隣に立ちアニキに言う。
場が少し落ち着いた時だ・・・。
「うん？　奥歯に・・・何か違和感が・・・！　ぺっ。　嗚呼っ！
奥歯折れてる！」
何か吐き出したアニキの手には、少し血がつい奥歯らしき大きな歯が乗せられていた。間違いない、あの一撃だ。歯を折っていたのか？　やってしまった。
心の中で叫びまくる。
そんなこと知らず、アニキは歯が折れた状況を思い出そうと考え始めた時、再び広美が動く。
「もしかして、佐々木さんが私たちにからんだ時、おもっきりよろけてそこ電灯に顔面ぶつけましたよ。痛くなさそうなので、言わなかったですけど・・・大丈夫ですか」
何一つ表情を変えず広美が嘘をついた。鮮やかすぎて何も突っ込めず、ただ広美のお芝居を見るしかできない。
「・・・大丈夫じゃねーよ。でも、気かけてくれてありがとう。明日病院でも行くよ・・・って、聞き忘れていたけど君、コイツ、幸一とどんな関係？　初めて会うし」
広美の演技に気付かず、さっさと話を変えるアニキ。機転の利く彼女をもって良かったと思った同時に、俺の尻拭いさせてしまったと新たな罪悪感が湧き上がってくる。正直に言えば良かったなと思うが後の祭り。広美とアニキ、俺はこの二人に借りを作ってしまった。からなず返さなければ。
と、思ってる事などつい知らず広美は笑顔で言う。
「今年の春から付き合い始めたばかりの恋人です」
「へぇー！　恋人か・・・・あっ？　恋人？　幸一、お前彼女いたのか！」
いつものアニキらしく冷静さを取り戻したと思ったとたん。広美の「恋人です」と発言した同時に、また先みたいに目を見開いて、

信じられない物を見るような、とにかくヒドイ。
ぐざ！　と、心に鋭利な物が刺さる。
「・・・いますよ。いちゃいけないんですか？」
「いや、そんなこと言ってないぞ。ただ純粋におまえみたいなロボ人間に、彼女がいるんて全く思わなかっただけのこと」
前言撤回だ。アニキに返す物などない。
「・・・そうですか。まあー良いです、こんなこと多々ありますから」
嘘だ。一応学校じゃお似合いの二人だと常に注目の的、アニキみたいな鈍い奴にはわからないだろうけど・・・。
「そうか。なら良いか」
顔が引きつってるアニキ。多分、今俺、相当怖い顔をしてるか、嫌な顔をしてるんだろうな。

取りあえず落ち着いた。
俺含め、広美、アニキ。俺がお客さんが来た時のために用意していた茶色い簡易椅子に座り、互いを見る形で事の経緯を聞くと驚いた。なんと、今日アニキは同僚の女性にプロポーズされたのだ。一見嬉しい展開だと思ったが、場所と相手が可哀そうなぐらいひどかった。
「会社で、アニキよりもできる女性に、貴方にはその人以外に相手になる人は居ない。だから、私と付き合えか・・・完全に拾い物宣言ですね。アニキ、御愁傷様です」
「気にしないでください。今の話聞いた感じだと、悪意ないですよ。ゆっくり考えていきましょう」
と、二人でアニキを慰める。
しかし前例がない話、どこまで慰められるか全然わからない。まして、俺達高校生の考えで大人の考えに太刀打ちできるか？　不慣れな状況に不安が消えない。
「ありがとう。聞いてくれて・・・・。あとは、歩いて考えるよ」

お礼を言い、立ち上がるアニキ。相談した効力か、酒が抜けたか、先より表情が良くなってる。
「一人で大丈夫ですか？」
広美も一緒に立ち上がる。
「大丈夫。本当にありがとう。折角の二人っきり時間だろ、俺なんか構うより一緒にいた方がいい」
そんな寂し言い方ないだろ。
寂しく、頼りない足取りで、両手で通勤鞄を包みながら帰る姿を見送るほど俺達は冷たくない。目線を広美と合わせ、全会一致、送ることにした。事故なんかに巻き込まれたら気分が悪い。
「広美先に行って。荷物まとめたらすぐ行く」
「うん、わかった」
小走りで、駅から国道の歩道へと進むアニキへ追いかける。
俺もすぐに簡易椅子や楽器類をかき集め、ロボに背負わせ、リモコンで演奏モードから移動モードへ変更する。
ウィーン！　正常に稼働してる音がロボから聞こえる。――よし！　行ける。
昨日の失敗で不安があったが、なんとかなりそうだ。すぐに歩け、と、指示をだし二人の後を追う。
最大速度で追いかけたいが、バッテリーの面やプログラムが処理できない危険性がある。音楽型で全力で動く必要がないからだ。想定外すぎる事態だ。
泣きそうな気分になるがこれも俺自身が起こした顛末、最後まで付き合うしかない。
でも、しかし、早い。なんであんなに早く歩けるんだあの二人。俺が国道沿いの歩道に差し掛かり、進行方向の右を向いた時には一個先の交差点の横断歩道を二人で歩いている。
距離を詰めるの大変ななのは明白。でも、やらなきゃ。覚悟を決め俺の相棒、ロボＵ－０２に更なる前進をリモコンで指示し、歩き始めた。

追いかけ始めて約二十分。怒涛の前進のおかげか、連続の赤信号おかげか、なんとか追いつけた。疲れた。相棒のバッテリーも気になる。

「お疲れ様。はいタオル」

「ハァー、ハァー、ハァーっ、ありがとう。歩くのも疲れるな」

息を整えてる俺にハンドタオルを渡してくれる広美、ありがたく借りる。

「悪いね。家まで送ってくれて」

と、少し先に進んでいるアニキが心配そうに言う。

心配できるような顔はしていない、まだ完全に昨日までのアニキの姿はない。

「どういたしまして」

日常的な、なんのへんてつもない言葉で返す。これが良いと思ったからだ。

・・・とにかく全員そろった。社会人一人、高校生二人、ロボ一台の珍走団ならぬ、珍歩団。時間帯的にあまり人気はないが、警察に出会ったら即職務質問のされる。危険な集団だ。

全然笑えない。・・・そんな状況なのに、なんかいい雰囲気に話が弾み、色々質問し合う。

詳しく俺達の関係を聞いてくるし、この先どうするのかまで聞かれた。赤裸々に話さなかったが、結構赤面しそう質問してくるアニキに対して何回女性と付き合ったか？　なんで今の仕事してるのか？　とか聞いた。

「・・・だよ」

「・・・・・・スミマセンでした」

聞いてはいけない事を聞いてしまった。話すどころか思ってもいけない、完全忘却必至、忘れないと。

二人で頭を下げ、忘れることをアニキに宣言した。

それから数分後。街灯が立ち並ぶ明るい道の先に、どこにでもありそうな二階建ての部屋の集まりが見えてきた。
「ありがとう。ここだから俺の部屋」
まだ生気の感じられない声で言ってくる。
「・・・そうですか、それじゃお休みなさい」
と、また簡素な言葉で返す。
「本当にあまり考えないで下さい。考えすぎは良くないですから・・・お休みなさい佐々木さん」
広美も何か言いたそうだが、言わないまま話を切る。
「・・・大丈夫。一晩寝れば落ち着くから・・・多分だけど。それでも、楽しかったよ、色々話きけたし。それじゃ、お休み」
手を振って、無理に笑顔を作って駆け足で部屋に入っていった。

歩行者2（後書き）

整理のつかない一馬。明日はどうなるか？　そんな終わり方です。本当ならいい感じで広美と一馬は出会う予定だったのに、あまりにもひどい・・・。

先の見通しがつかない状況ですが、楽しいで書いていくので皆さんも楽しんで見て行ってください。

歩行者3（前書き）

どうも鷹崎です。４話目をお送りします。
今回は一馬だけの視点です。もう少し長く書きたかったんですがここで言い訳です。今している仕事場で秋の人事異動がありまして、かなり忙しい場所に当たり、連日3時間残業、土曜休日出勤で三時間残業で一気にスピードダウン。週一投稿に限界が出てきました。
申し訳ありませんが、投稿できる日に出したいと思います。楽しみにして下さる皆様、本当に申し訳ありません。
八月、１５０アクセスありがとうございました。二ケタいけたら良いなとおもったら三ケタでした。感謝です。

歩行者3

「お前じゃ、誰とも結婚出来ない。お前じゃ誰も結婚出来ない。おまえじゃ、だれともけっこんできない。オマエジャ、ダレトモケッコンデキナイ・・・」

脳内で彼女声がこだまする。

起きてる時も、寝てる時も関係なく響く・・・・。

夢の世界、現実の世界かどちらか分からなくなった・・・気がした。

「嗚呼っ、今日も仕事だ。これぐらいで頭がおかしくなることはないいんだな」

己の図太さに恐れ入る。

――それに昨日幸一と、、初めて会った彼女の広美さんに話聞いてもらったし、逃げ出すのは・・・嫌だし、けど、やっぱり・・・。

と、うだうだ夜明け前から考えている。

もう時間帯的に寝るのも不可能だし、寝れば先と同じくこだましそうで怖い。それに絶対に遅刻しそうだ。

窓の外がだんだん明るくなってくる。時計を見なくともあと数時間もしないうちに出勤しなくては。

行きたくない。が、しかし、逃げだと思われたくない。でも・・・。

迷いが出ててくる。

いっそこのまま・・・と、考えが思いついた時だ。

トントン。と、小さな音が玄関から聞こえてきた。誰かがノックしているようだ。一体誰だ？

立ち上がりざまに時計を見てみると午前六時半だ。新聞配達は五時ぐらいだし、牛乳配達はまだ早い・・・。

音を立てずに、ゆっくりと、玄関に近づき外に様子を見る前に気配だけを感じ取ってみる。シーンっと、していて音がしない。もう

居なくなったか、一人だけ立っていてわからないか、さては集団でそれほどの・・・・・な訳ないよな。
ドンドン！
「！」
一人納得しようとした瞬間、一層大きな音が扉から聞こえる。
声は出さなかったが、気配出しかもしれない。頼む誰だかわからないが、気付かないでくれ！
「そこに居るの分かってるんだぞ。出てこい、佐々木。折角女性が迎えにきてやってきて顔も出さにとは、失礼だぞ」
？　声は！　一之宮！　何故にここが！
慌ててのぞき窓から外を見てみる。
「っ！」
俺自身の目が幻覚を見え出したのかと思ってしまう。間違いなく、紛れもなく、正真正銘に一之宮が俺の部屋の玄関にの前に立っている。黒いシャツに、白いパンツ、女気のない、何時もの彼女の仕事着だ。
住所教えてないのに・・・・。
「課長に教えてもらった。結婚前提だからって。観念しろ！」
井上！　訴えてやる。
「・・・確かに俺は部屋にいる。しかし、住所まで、俺の個人情報知られている人間がいる奴の前におめおめ出てくるような程俺は愚かじゃない」
「おおっ！　居るじゃないか、一緒に朝食でも食べにいかないか」
「・・・行きたくない。俺の社会的死をもたらした奴とは、拒否する！」
「拒否だと――私みたいに、佐々木の事をっ」
「ストーカー！　消えろ！」
「・・・・・・」
あっ！　言い過ぎた。
のぞき窓の向こうに立っている一之宮。ショックを受けたのを隠

し切れないのか、一気に表情から元気が無くなり、顔を下げ、階段がある方へ歩き始めた。
帰ってくれたなら好都合なはずなのに、なんか嫌な気分になる。思わず玄関を開け放った――！
「甘いな佐々木！　所詮お前みたいな男は、最後に女に騙されて終了するタイプだ。おとなしく私と！」
半ば叫びながら一之宮が突撃かましてきた。
予測出来ていたのに突撃を許してしまった事を悔やむが遅い。扉を緊急閉鎖を試みるが、彼女の勢いに押され、こじ開けられ、侵入されてしまった。最悪だ！
「ハア、ハア、ハア・・・。観念したか？」
「・・・しました。けど、お前とは結婚する気は無い！」
「いずれ、そういう気になる」
勝ち誇り、満面の笑顔で言い放つ。

とある駅ビルにあるホテル。会社通いに使ってる駅に突き刺すようにそびえ立つように存在する建物。たまに雲がかかる。
常に素通りで就職する前も、今も一度も入ったこともない。そんなホテルになんの用だ？　疑問に思いながらも一之宮について行く。
――ったく、こんなところに朝食でも食いに行けるような・・・・！　あった。
寝不足で、突撃かまされて、イライラが溜り始めたところに思わ驚いた。
朝食ホテルバイキング。コーヒー一杯で、バイキング利用可能と書かれた看板が堂々とホテル出入り口に掲げてある。
「このホテル、あまり朝食バイキングを宣伝してないんだ。口コミサイトで偶然見つけて、昨日のお詫びのつもりで誘ったんだ。まだ、佐々木の携帯番号教えてもらってないから、直接行くしかなったから・・・許してほしい。

それに、信じてもらえないと思うが、あの時、佐々木が出てこなかったら本気で帰っていた」
真剣な顔で俺を見ながら言う。
「・・・分かった。反省してるようだし、昨日のこと無かったことにしてやる。だから、今日出社したら真っ先に冗談だったと皆に説明して欲しい。それだけで良い」
真剣な人に許さんと言えるほど俺は強くないし、ましては真剣な表情で女性に見つめられる事自体初めてだから思わず許してしまった。声もちょっと上ずってしまう失態、弱みでも握られていないか心配になる。
「分かった。それで許してくれるなら早速話を片付けるよ。立ち話もなんだし、店に入ろう」
一気に杞憂になった。
てっきり突っ込んくると思ったが、安心し、ほころんだ顔で言い、先に店に入って行った。
「あんな顔するんだ」
と、一人店外でそう呟いて、彼女の後を追う。

店内は想像通り広かったが、大して装飾品など無く、どこにでもありがちな喫茶店的な感じな造りだったけど、料理の量と質は今まで見て食べて一番だった。そして一之宮が言ってた通りか、人は大して多くなく、初見の俺でもわかる全員常連だ。
少し周りを見て、店内の一番奥の席に座る。一見様の俺達には中央に座る気がしなかった。
二人同時に座った瞬間に、ビッシと決めた黒いスーツを着ている男の店員が注文を聞きに来る。あまりにも早すぎてメニュー表に触れる事すら出来なかった。
「アイス二つで」
一之宮に相談せず言う。
怒るかなと思ったが、うなずいた。

「アイスにはガムシロお入れしますか？」
と、店員が言う。
「入れてくれ」
「私はいい。ストレートで」
「かしこまりました。バイキングはあちらでご自由にどうぞ、スープはコンソメとカボチャのポタージュです。専用のカップで。それではごゆっくりどうぞ」
言い残し、店員立ち去る。
ほんの数秒の出来事だったが、まるで嵐が着たいみたいだった。
「店員のスピード早かったな」
「早すぎだ。俺達みたいな初めての客にはきついぞ」
「マニュアルか、ただ暇なのか、分からんけど、鈍い奴よりはマシだ」
近場に居ないことを確認し、評価する。
「確かにな。それよりも食べ物取りに行くぞ、せっかくのバイキングだ」
「会話よりも、メシか。ある意味本能のままだな」
立ち上がりつつある俺にカチンと来る一言を放つ一之宮。先の反省はどこに消えたと言いたいが、またややこしい事態になるのはごめんだ。無視してバイキングコーナーに向かった。

――こうして一時的だが、結婚騒動は収束した。

しかし、一度広がった噂は簡単に消えなかった。、

歩行者3（後書き）

応急処置みたいな作品で申し訳ありません。
次回は、全キャラ登場です。更に面白く書かせてもらいます。楽しみにしていてください。

歩行者４（前書き）

まいど突貫小説制作中の鷹崎です。なんとか今週も投稿にこぎつけました。

前回言い訳した通りの状況下そして、シフト変更。全身筋肉痛の最中の執筆、実に面白い展開です。

全員参加、そして、新たな登場人物。話が動きだし始めます。

歩行者４

結婚騒動から一週間経過した。
私の悪い冗談だと言ったおかげで騒動はある程度収まったが、一度広まった話簡単には消えない。なんて愚かなことをしでかしてしまったのだろう。
久々の残業を終え、帰宅中に考える。
あれ以来、佐々木は私に対して何か考えて、喋るようになった。多分今まで以上に距離を置くためだろう。逆効果だけじゃ説明しきれない事態にになりえることぐらい容易に予測できたはずなのに・・・何故？　何故あんなことを。
悔やみきれない気持ちを抱え、佐々木と朝食を共にしたホテルがある駅の構内に入り、七台設置されてる券売機の上にある電光掲示板を見る・・・・？
あれ？

――またのご利用を心よりお待ちしております。

と、電光掲示板に書かれ、何往復している。
嘘だ！　終電は二十四時五分のはずでは？　まだ私の時計は二十四時、終電まであと五分ある。
事の事態に混乱しそうになるが、丁度、どこから駅員が現れた。すぐにとっ捕まえて、状況を説明した。
「ああっ、七月の初めからダイヤが変わったんだよ。知らなかったのですか」
駅員は慌て気味の私に冷静に伝える。
嗚呼！　佐々木の事を考えすぎて調べるのを失念していた。なんたる失態。
駅員が立ち去ったの確認して壁にもたれ、携帯でダイヤ変更を調

べる。本当だ。『七月、夏のダイヤ変更』と、サイトのｔｏｐにデカデカと書き記されている。
バチでもあったかな・・・？　気が落ち込みそうになるけど、明日も早い、とにかく休める場所を探さないとけない。
電源ボタンを押し、ひまわり畑の待ち受け画面まで戻り、周辺の地図情報のアプリに入る。これなら安い、宿代わりになる場所を探し出してくれる。すぐに駅の名前を入れ、検索ボタンを押した。
しばらくお持ちくださいとの表示が二秒続いたのち、駅周辺の地図が出てくる。ネカフェぐらいなら近場にあるはずだ。
画面を睨むように見る。

駅から２３８メートルの場所に、私が行きたかった場所に、アイコンがついてる。小さくガッツポーズ。

そこから直接店舗検索して、店内の様子を確認する。
どこにでもありそうな普通のビルの五、六階にあって、五階に受付。ちゃんと二十四時間だし、マットブースもある、おおっ、これ空席照会もできるんだ。すぐにマットブースの空席照会するのところに合わせプッシュ・・・『ただ今の時間帯での空席は三つです』と、書かれている。なくなる危険性ありだ。
清掃活動が始まりだした駅構内を小走りで抜け、地図通りに目的地に向かった。

写真通りビルの中に店舗があった。
小さなエレベータで五階まで上がり、開く。
「いらっしゃいませ」
私が出てくる同時に、メガネをかけた少し初老かかった男性店員が元気よく、かつ時間帯に合わせた小さな声で言う。
？
派手な装飾品だらけの店内と、服装が彼の存在を違和感にさせる。

赤色のベストのせいか？　それとも・・・。
変な疑問を持ちつつ、店員のいる受付に向かう。
今どきの店員に負けないぐらいハキハキしいて丁寧な説明、優しい口調が良い。まだ利用していないのにまた来たと思った時だ。
後ろのエレベータが開く。
ほかのお客が来たと思った。
ウィーン、ウィーン、ウィーン。
！　人間にしてはおかしな足音が響いてくる。
「あれ！　幸一君と、広美さんではありませんか、何でここに」
男性店員が説明を止め、目を輝かせ、私の背中の後ろに視線を向ける。
「いやー、ロボのバッテリーが危ないんで、充電がてら休ませてもらおうと思って」
「こんばんわ、お久しぶりです斉宮さん」
「また。お造りになられていたのですか？　本当にお好きになんですから・・・困ったものだ」
私を無視して、この場を離れ、後ろの声がする方に行こうとするが、
「斉宮さん！　お客さん無視しちゃダメ！」
と、止めた。
感心だな。声は若いが、ちゃんとしている。
何かしら言おうと振り向いた・・・？　？　？
「ロボ！」
若い男女に挟まれるように、映画で見たことありそうな二足歩行式のロボが立ってる。
信じられない光景に思わず大声で言ってしまった。

「申し訳ありません。驚かせるようなことをしてしまって、気付かないふりしてもらえると嬉しいのですが・・・」
斉宮と言う男性店員が謝り、頼みごとをする。気付かないふりって、言われても、思いっきり見てしまったし・・・どうする？
「わかった。だから部屋を用意して欲しい」
「番号３１５の、禁煙席です。階段下って、左手奥です」
斉宮の提案をのむ形で、この場を乗り切ることにした。高い確率でこれが良案だ。
すぐに受付とロボを持つ若い男女に背を向け、即その場を離れる。
これで終わったはずなのに、なんかまた会いそうな気が収まらず、なかなか寝付けられなかった・・・。

◇　　◇　　◇

ザッ！　ザッ！　ザッ！
と、音が鳴るぐらいまで大量に荷物を赤いリュック詰め、休日、いつもの訓練コースを歩く。
事件直後は心労で一時訓練を休止していたが、一週間ぐらいで立ち直り、ブランクを感じつつ調子を取り戻していく。久しぶりの平穏だ。
青い空が輝いて見える。
至福の時間。
幸せを感じ、久々の何も考えないでいられる時間を楽しむ。これが永遠に続けば良いなと思う――。
プップー！　でかいクラクションが響いてくる。
「気をつけろ！」
と、乱暴な運転をしてくる派手な異様なでかさの車。そして、お約束のグラサンを着けた怖い男が、通り過ぎる間際にわざわざ窓を開けて叫ぶ。
「御忠告ありがとう」

同時に、お礼を言う。
キッー！　と、ブレーキ音を轟かせながらよろめき去って行った。思わぬお礼に動揺したか、なんか動作をしくじったか・・・事故ればよかったのに――。
そんな展開など起きず、平穏が続く。
住宅街を抜け堤防に続くコンクリート製の階段、ざっと見て軽く三十段。普通なら余裕だが、この荷物と今の体力じゃ結構きついし、太陽が俺の頭上に居て最悪に暑い。熱中症が熱射病にないかねない。
パスすることは出来る。しかし、ここで退くような程俺は弱くない。
階段に足を伸ばし、一歩ず上って行く。
ゆっくりだが、調子は休止前とは変わっていない、良かった――。

パチン！

はっ？　何だ？　この音は？
七段目に差し掛かった時、今まで一度も聞いた事のない音がリュックから響いてきた。
想定していない事態にビビる。場所的に確認も不可能。

ガシィ！

更に音が。
！　まさか――！　こんな所で、破れかけている？　思いついた途端、脳内に思い当たる出来事が何度も浮かぶ。特に、このリュック高校の通学に使用していた・・・ガタがきていてもしかたない。
でも、何で今？
焦り始めた時だ――。急に重さの場所がリュックの後方に移る、俺の体も後ろに傾く。全ての力を出して前のめりになるが、荷物の重さに負けた。

「終わった」

視線が空に向く。

終わりにしては、悪くない爽やかな夏空だ――。

「終わっていないぞ佐々木」

走馬灯の始まりに一之宮の声が聞こえてくる。なんてしつこい奴だ。まぁー、今まで会った女性では一番印象的だったから、最初に現れても問題ないが、何で？　一之宮。

「早く足に力を入れろ！　私の力じゃ長くはもたん。急げ」

疑問になってる最中、再び声が――って、まだ俺生きてる！　倒れているの途中で、止まっている。奇跡だ。

「早くして！　足が、足が！　殺すぞ！　佐々木！」

奇跡に喜んでるわけにはいけない、なぜに一之宮が俺を助けているのいかわからないが、このチャンスを逃せば本当に終了だ。

「わかった！　今やる」

全ての力をまた足にため、体勢をもとに戻した。

今、本当に、助かった。助かった！

「恩に着るぜ、一之宮」

「どういたしまして」

互いに笑顔で向き合う・・・？　何かがおかしい。

一之宮がが近くに居たから助かったのは事実だが、何でここに居るんだ？　俺、話した覚えなど無い。

「一之宮。何でここに居る？」

「・・・あっ！　偶然」

・・・つけてきたな。ったく。

「・・・命救ってくれたから偶然にしてやる。だが、次はないぞ。同僚だろうと、何だろうと、容赦しないぞ！」

誤魔化そうとしてる一之宮に言い放つ。

「別に着けてきた訳じゃない。いい友達になろうと思って、佐々木

の部屋に行ったら丁度でかい赤いリュックを背負って出ていく所みて、偶然みたいに・・・」
頭下げて言い訳じみたことを言い続ける。表情から見て、反省しているみたいだ。しかし、こんなことを続けられても正直困る。仕事、私生活、すべて壊される危険性が出てくる。
でも、ここまで女性に好意もたれたのは初めてだ。嬉しいのか？
困るのか？　簡単に考えがまとまらん。けど、この状況で言えることは一つ、俺はまだ誰かと付き合う気は無い。
「前言撤回だ容赦しないは忘れろ。ここでいるのもなんだ、涼しい場所に移動する。リュックことも心配だしな」
下げた顔を一気に上げ、俺を見る。先までとは全く違う笑顔だった。

訓練コースの休憩場所で、夜は幸一が演奏会する駅にある小さな喫茶店。一之宮が教えてくれた奴とはうって違って小さくカウンター席が四つで、テーブル席は二つ、メニューも定番物しかない。が、なぜがすごく人気があって、昼下がりは平日で賑わう。
テーブル席を狙っていたが、すでに先客が二つとも取っていて楽しく会話している。仕方なく、まだ誰も座っていないカウンター席に座る。
「アイス二つで」
一人で店を見ているおじさんに注文言い、隣に座る一之宮に言う。
「なあ、一之宮、一体何が望みなんだ？」
「前言った通り私は佐々木と結婚望んでいる。しかし、私は断られた。だから、せめて友達になりたいと思って行動したら・・・全部空回り、失敗した。それだけ」
「・・・それだけ」
寂しそうに俺に気持ちを伝える。
罪悪感が募る。

「勢いに任せたのがまずかった。もう少し考えて、場所も考えて、時間帯も考えて・・・ああっ」
「・・・なんて答えれば良いかわからないけど、取りあえず落ち込むのは止めてくれ、調子がうまく合わせられない。まるで俺が一之宮を傷つけたみたい見える」
とにかく話し続けないといけない気がする。黙ったら俺の負けだ。
「あの告白、いや、あのプロポーズは私の全てだ。それ以上に無い」
断言する一之宮。寂し表情から一転、決意に満ちる表情に変わる。揺るぎない闘志が見える。
「・・・わかった。一之宮の気持ちは理解した。でも、今、俺は誰とも付き合う気は全くない。ましては結婚など不可能だ。俺の気持ちもわかってくれ」
一瞬押し切られそうにそうになるが、一之宮も気持ちを伝えられたのだ、俺だってちゃんとした気持ちを伝えるべきだと冷静に思い、言う。
「・・・そうか。でもチャンスはあるんだな？　今の佐々木の言葉を聞いた限り」
「・・・まぁ、そうだな。でもどうなるかわからんぞ。一之宮のプロポーズも、俺が売れ残りなったらて言ってるし、売れ残るかな？」
聞き分けの良い奴でよかった。これで落ち着くかな？
「いずれそうなる。私にはわかる。チャンスもらった以上」
怪しく微笑む一之宮。でも、その笑顔も何の策略もないただの女性の笑顔だった。
「アイス二つお待たせしました」
おじいさんが大きなグラスに淹れたアイスコーヒーを俺達の前に置く。その最中、おじいさんなんか笑っていた。聞かれた？
恥ずかしい気持ちがこみ上げてくる。
「せめて・・・教えてくれ」
「何を？」
「携帯番号とアドレス。まだ聞いていない、教えないと何がある度

に部屋に乗り込むぞ」　！　それはまずい。
「・・・わかった。教えてやるから妙な真似しないでくれよ」
「わかった」
この日を境に、俺達は友達として付き合うことになった。

◇　　◇　　◇

幸一が寝付いて数分経過した。
私と幸一は、元お父さんの工場で働いていた人が、定年後に再び働いてるネカフェで一夜を過ごすことになった。原因は、幸一が制作した二足歩行型ＭＰ３のバッテリー残量を無視しての演奏強行。久々に五人以上のお客さんで調子に乗ったのが敗因。帰りの分まで考えろ！
私の気持ちもわからないでスーピィー、スーピィー寝息立てて寝ないでよ。
手で鼻を掴み、息を止める。
「スーピィー、スピーィ・・・ぐがっ！」
素早く離し、気道を確保してやる。死なれたら困る。
時計は一時を向いてる。いい加減私も寝るか。
幸一が被っている布団に入り、添い寝する形になり、そのまま寝付いた。

◇　　◇　　◇

『エールフランス２４９便。パリ発成田着定刻通り、八時十分到着です』
私は降り立った。アナタの憧れの地に。

歩行者４（後書き）

楽しんでもらえたら幸いです。新しい登場人物の紹介は次回にします。何時になるやら？

不定期にならないように努力していきます。今後ともよろしくお願いします。

歩行者5（前書き）

どうも鷹崎です。次の話を投稿します。
新キャラとして、亡き夫の遺志を受け継いで日本に引っ越してきたフランス人女性のアリサが今回から登場します。前回少し入れましたが、全然わからなくてごめんなさい。
佐々木と一之宮たちの仕事の仲間も出てきますのでそっちも楽しんでください。
この小説を楽しんでくれたなら幸いです。

歩行者5

――アリサ、私がやり残したことが君を守ってくれる。だから、出来るだけ早く私に追いつかないでほしい。ずっと夢見ていた国、日本へ行ってくれ。それが私の最後のわがままだ・・・。君ならまだできる。信じる・・・・。

『――駅・・・お忘れ物ないように』

夢に狭間に聞きなれないアナウンスが響いてくる・・・！　見覚えある駅と同じだ。

強引に意識を取り戻し、全ての荷物を持ち上げ、出口に飛び出した。

間一髪、私が出てすぐに電車の扉が閉まり、出発して行った。危なかった。

目の前にあるベンチに座り、息を整え、夫フリス残した２００９年ダイヤリーのページをめり、目的地の駅名を確かめる。間違いない、ここだ。

私の知らないうちに、夫は日本移住計画を考えていた。癌で苦しんでいるはずなのにそんなことを無視して、「二人で暮らすんだと」笑顔で言ってた。

私は誓い、前々から夫が出張だと嘘で通っていた日本の不動産会社で借りた古く、いい感じの物件があるこの町に来た。本当ならもう少し早く来たかったけど、何時間も東京駅で苦しんでしまったし、乗り換えも間違えてしまった。

ダイヤリーのメモ欄に書いてある地図と住所を見て、ベンチにから立ち上がり、改札を目指す。

駅員さんの協力のもと自動改札機を突破した。

地図の道順だと、出口は南口からだと書いてある。まめな夫で良かったと安心する。

数歩南口に向かってる時、音楽聞こえてくる。唄は今まで聞いたことはないものだ。多分イギリス英語だ。日本人は頭は良く器用な人間が多いと聞いたことがある。だから、小国なのに世界と拮抗できるんだと。それを思い出し、音楽の出所に向かう。

エスカレーターで一階にたどり着き、耳を澄ます。

「左」

独り言いい、音楽が鳴り響いた方向を向く・・・・！　？

？　？　？　何あれ？　いくらロボット大国だからっと言っても、二足歩行で演奏できるんなんて聞いたことないわ！　凄すぎるわよ日本。

演奏するロボット、その傍ら男の子が一人英語で歌を歌い続けている。一見異様な雰囲気だが、なぜかその気にさせない謎だ。

男の子が歌いながら会釈する。気付かれた。

まさかあの子がロボットを作ったの？「器用だがら」と、言う夫の声が響く。可能性はゼロじゃない。

唄終え、男の子が方に歩いてきて再び会釈して、英語で私に話しかけてきた。思わぬ状況にうろたえてしまったが、

「私は日本語でも大丈夫よ」

と、言い返した。

「・・・よかった。凄いですね、日本語喋れるなんて。どこの国の人ですか」

「フランス、パリから来たわ」

「フランス！　パリ！　初外国人お客様、フラン人の美人のお姉さんいただきました」

「お姉さんと言わない年よ。あまりからかわないで」

「・・・すいません。つい、ヨイショしてしまいました。お詫びに、一曲どうぞ」

男の子は笑いながらリモコンらしき物でロボットに向け、再び音楽を流し始め唄いだす。

目の前にある椅子に座るように右手を差出し、私に促す。

促された通り、簡易椅子に座りしばらく演奏会に耳を向けた。

「お付き合いありがとうございました。これにて、今夜の演奏会これにて終演です」

一曲きちんと唄って、私に向かって深く頭を下げる。

「良い演奏だったわ。隣にいるロボットも良いい相棒ね」

「いえいえ。まだ調整がいる奴で、二三改良が必要です」

「謙遜しなくてもいいわよ。おいくら？」

「・・・・！　別に、金とって演奏してるわけじゃないんで、お代はなしです。趣味で、無料です」

両手と、頭を同時に振りながら言う。

「あらそう。もったいないわよ。お金っても問題ない出来よ」

「それでもダダです。俺も、みんな楽しければ良いんです」

褒めたらきっぱり言われた。それなりのポリシーがあるなら仕方ない、お言葉に甘えてお金を払わずに行こう。

「わかったわ。それじゃ、また暇になったあ聞きに来る」

「それじゃまた今度で」

と、言い交し、男の子と別れた。

不思議な子とだと思ったけど全然普通の男の子だった。ただ、あのロボットが隣にいるだけで、大して変わらなかった。また会いに行こう。日本に来て早々楽しみができた。

夜は深けていた。日本時間で夜中の一時、完全に深夜だ。

夫は、「日本の安全神話はもう無い、夜中の一人歩きは危険だから避けろ」と言っていた。早速破っているけど、仕方ない。初めての町で、しかも夜、迷うわよ。嘆く。

ダイヤリーの地図通りだと、もうすぐなんだけど・・・・。にらみ合うように地図を眺めた時――。

ジャリ！　ジャリ！　ジャリ！　ジャリ！

突如、得体のしれない音が暗闇から響いてきた。
「！　だ、誰？」
音がする方を向いて、小さく叫ぶ。
「・・・ハァ、ハァ、ハァ、み、道に迷ったのですかぁ？　お、俺、お、俺で良かったら、案内しますよ」

でっ、出た！　赤い血の付いたリュックサックを背負った長髪男！
思わず叫ぶ！
「いやぁー！」

ゴーストじゃなかった。
親切に道を教えてくれるはずの人を、警察送り寸前まで追いつめてしまった。
私が叫び、周りの家の人たちが飛び出してきて、私を襲うとしてるとしていると勘違いして、袋叩きしてしまった。冷静に考えれば、赤い血はただ赤い着色で、普通のリュックだった。
すぐに止めさせ、助けに来た人、間違いされた人に全力で謝って、大事にならずに済んだ。
そして、今になる。
「勘違いされるような現れかたした俺が悪いから気にするな」
「でっ、でも」
「いいよ。女運悪いの慣れてるから」
「そっ、それでも」
言い争い寸前まで来ていた。
「・・・明日仕事なんだ。早く帰って寝たい。だから、本当に気にするな、じゃ」
と言い残し、リュックを持ち上げ、さっさと切り上げて行ってしまう。
「せめて、名前だけでも」

「名乗る・・・佐々木一馬だ。名乗る者じゃないと言って、また変な形で再会したくない。きっと、また会うだろ、じゃぁな」
ジャリ！　ジャリ！　と、音を立てながら暗闇に消えて行った。
「また会うか・・・それまで」

その一件後、私は無事夫が用意してくれたアパートにたどり着いた。
『この部屋は古く、立てつけは俺達が住んでいる場所以上に悪い。だが、日当たりはこの町で最高で、綺麗な夜景が見えるんだ。病院を抜け出して、寒い夜空の下綺麗な夜景を見ながら君にプロポーズしたのを思い出して、それに近い環境のここ選んだ。気に入ってくれたかな？』
サビまみれの階段をのぼりながら再びダイヤリーに綴られたフリスの言葉を見る。
「あなたが選んだ場所ならどこでも気に入るわよ」
軋む外廊下。時間は深夜の二時。極力音を立てずにカギに書かれている番号の部屋着く。セキュリティーは完全に不備な木製の扉、私でも押し破れそうだ。
鍵穴にカギを差し込み回す・・・ガギ！　ガギ！　回らない。壊れた？
ダイヤリーを見る。
『カギは回りにくい。できるだけ早く修理した方がいい』
・・・私が着く前に手配して欲しかった。
再び慎重にカギを入れ、ゆっくり回す。ガチィン。開いた。
扉を開き、重い荷物を入れ閉める。そして、深呼吸。木の香り私の周りに集まる。
夫は私が好きなの物を全部覚えてくれた。
感謝しなくてちゃ。
部屋の窓から夜景が少し見える。「靴を脱ぐのを忘れるなよ」と、警告が頭を過ぎり、靴ひもを外して、靴を脱いで、部屋に入り、夜

景が見える窓に向かう。
「・・・ありがとうフリス。最後までアナタを愛すわ」
プロポーズを受けた時よりは劣っているけど、窓一面に日本の夜景がはっきりと写し出せれている――。

◇　　◇　　◇

「佐々木！　この段ボールあそこに運んでくれ」
「了解」
目の前で佐々木が、同僚の武市頼まれた資料入れの段ボールを運び何往復している。
朝から経理部の要請で、資料整理の手伝いに営業の私と佐々木、武市、一つ先輩の宮崎さんが選抜され、走り回されている。
一段落して、佐々木と武市が資料庫から出て行ったのを確認して、宮崎さんが好奇の目を輝かせ、私に迫ってきた。
「聞いたよ。佐々木からケーバンと、メアド手に入れたって！　よくやった。褒めてやる」
と言い、私の頭をなでる。
「や、止めてください」
「おっ、ご、ゴメン。息子たちのにする癖やっちまったぁー」
ケラケラ笑いながら両手を合わせる。
「でも、進展ありで良かったよ。あのプロポーズ事件で全部終わったと思ったけど、前以上に仲良くなってるように見るね。まさか婚姻届を持って押しかけた？」
「そこまでやってない」
「やりかねないから言ってるの。したら捕まるわよ～」
茶化すように笑いながら言い続ける。
この人はいい人なんだけど、時には誰以上に付き合いにくい。
「本気で怒りますよ」
「悪い悪い今度おごるから許して。ついでに、佐々木君付きで」

完全に乗せられてしまい、数分間で疲れてしう。なんでこんな人に相談してしまったんだ。迂闊だった。
「そんなに露骨に嫌な顔しないで、本当に悪かった。今度困った相談して、援護してやる」
一気に頼りになる女性になる。最初からボケてる人として会いたかった。絶対に弱い所見せなかったのに。

十分間の小休憩を取ったのち、再び作業が始まる。
男性陣は引っ切り無しに段ボール運びに専念している。
到底佐々木には近づけない。
「佐々木、武市。さっさと仕事片付けてこっち手伝え」
「無茶言うな！　あと三十箱以上あるんだぞ、整理と一緒に考えるな」
宮崎さんが言うと、武市が言い返す。
「わかった。頑張れよ。
・・・だって、今の速度だとあと二十分程度で終わるはず。それから手伝ってもらう」
ニヤッと、私に顔を向けて小さく笑う。お詫びつもり？
「そ、そうですか？　わかりました」
合わせて私も返した。
そして、宮崎さんの予想通り二十分程度で二人は仕事を終え、私達の手伝いに来た。
「手伝いに来たぞ。これでいいだろ」
「ああっ、皆で一気に仕事をすまそう」
それから整理のスピードは上がり、たちまち仕事は終盤までこぎつけた。その間、私は出来るだけ佐々木の側で仕事して、数回手伝った。いつもの嫌がる表情はなく、つね黙々と作業していた。少なからずとも進展している気がした。
ゼロからのスタートじゃない、最悪のマイナススタートでの始まり。常に劣勢下の状況の中で必死にだった。

その時、宮崎さんに苦しんでるのを見抜かれてしまい、全て話し終えた同時に計算機を取り出してマイナス１００を二乗した答えを見せた。

――マイナスからプラス変換成功。今のペースのまま突き進め。

励ましてくれた。

すごく嬉しかった。

そして、少し進展した今がある。

「これにて終了。胸張って定時で帰れるぜ」

武市はバンザイして資料庫内をゆっくり歩く。

「そうだな、久しぶりに定時も悪くない。今日も長い時間練習ができる」

「佐々木は歩くのが好きだな、ほかに活動している奴居ないのか？」

「居ない俺一人だ。仲間集めたいけど、どうすればいいと思いますか？　宮崎先輩なら」

「ホームページ作って募集かけるとか、関係サイトで探すとか」

二人で相談会始める。宮崎さんは始めたすぐに私を見て、参加させようとしているのがわかるけど上手く入り込めない。

「そうだな・・・それも悪くないけど、できたら身近な――」

宮崎さんの目が光った、

「なら一之宮がベストよ！　最近太ったって私に相談してきたばかり、痩せる歩き方教えてあげて」

待っていましたと思うような勢いで話す宮崎さん。援護してあげるってこいうこと？　せめて予告ぐらいしてほしい。

出口に向かっていた武市も思わぬテンションに驚き、軽く滑る。

「えっ？　そ、それって――」

佐々木も思わぬ奇襲に、次の言葉を選べずにいる。更なる追撃を入れる。

「折角佐々木の事慕ってる人の申し出を無視する気。いい物件よ！
イエス、ノーどっち？　はっきりしろ」
「・・・イエス。一之宮が良いと言えばの話だけど」
更なる進展のチャンス。ありがとう宮崎さん。
「確かに。佐々木の歩きには私も興味がある、参加させてもらおう」
何時もの話し方でイエスと答える。これで、佐々木と一緒にいられる時間が増える。嬉しさで飛び回りたい。
「成立だね。報酬として、今度おごれよ二人とも」

「え？」

私と佐々木同時に言う――し、しまった！　大酒悪魔に頼ってしまった。巻き添えを食らった佐々木。
言わせてはいけない、言わせる事態を作らない最前提忘れてしまった。すでに、武市はいない、おごれの単語が出た同時にタッ！と駆け出す音が聞こえた気がした。逃げた。
軽い気持ちで宮崎さんを誘えば、半月分の給料をたった一晩で飲みつくされる！
「じゃ今度ね」
鼻歌歌いながら佐々木と私肩を叩いて、スキップしながら資料庫から出て行った。
今月は地獄入り決定の瞬間だった。

◇　　◇　　◇

広美とネカフェで一夜を過ごした。
俺が起きた時はまだスヤスヤと寝ていて、起こさないように慎重に毛布から抜け出し、斉宮さがいる事務所に向かう。
「鮫島工場の幸一です。斉宮さん居ますか？」
ガチャと扉が開き、時間帯責任者の人と、斉宮さんが出てくる。

「いるよ、中に入って」
「応急処置完了だよ。予備の配線で動くようにしといた。無理に動かしたから過度に電力が流れたとみる、その影響で回路が数か所焦げてるよ。帰ったらプログラムチェックしたほうが良い。帰る分なら問題ないよ」
中に入るなり斉宮さんの説明が始まる。流石元、親父の工場本ライン保全責任者だ。定年退職しても腕に落ちはない。俺が整備するよりきれいだ。
「ありがとうございます。早速整備してみます」
「うむ。それがいい、困ったらいつでも連絡してほしい。ちゃんと整備すればあと四五年は持つよ」
夜勤明けとは思えぬ笑顔。俺達より格が違いすぎる。
二人にお礼を言い事務所をロボと一緒に離れる。そして、起きたばかりの広美に斉宮さんが説明したことを話て荷物をまとめて、会計で料金を払い、店を離れた。

歩行者5（後書き）

最後までお付き合いありがとうございます。

レギュラー陣全員集合させました。一か月かかったりました。疲れた。

ここから、ここから自分にとって本当のスタートラインです。いよいよ話が本格的に行ける。楽しく書ける。

途中リタイヤがないように全力尽くします。全話終了までお付き合いお願いします。

歩行者６（前書き）

どうも突貫小説製作者鷹崎です。
今回も無事に投稿できました。いやー疲れた。
幸一と広美の話をメインに書きました。一馬たちの話も入れてますのでどうぞ楽しんでください。

歩行者6

「フッフ～ン、フフッ～」
朝から訳の分からない鼻歌を歌い続ける幸一。偉くご機嫌だ。
クラス全体から異様な目線を集めていても気にせず、（気付いていない方が良いかも）一節、一節違うパターンで奏でる。
「広美さん。ちょっと良いかな？」
担任の吉野上先生が私肩を慎重に突っつきながら言う。小心者先生じゃないけど、こういう少し変な事態に弱い。
「ハイ？　何ですか」
振り向きざまにこたえる。
「確かた鮫島君と付き合ってるて聞いたんだけど・・・それ本当？」
「ええっ事実です」
校則には男女交際を禁止する事項はないからはっきりと言い返す。別に隠してる訳でもないし、聞いてくるなら答える。しかし、なぜ今？
「それなら良かった。じゃぁ聞くよ、鮫島君頭でも打った？　広美さんがショックな――」
「打ってもいませんし、ショックなこと言ってもません。言ってもあんな風になりません！　私だって付き合い始めて、初めて事態で混乱してるですから変な事聞かないでください」
「ゴメンナサイ。なら良いけど、何時もなら朝から職員室にきてロボ話していくんだけど、今日は来なくて・・・気になって教室に来たら・・・あーなってた」
先生も混乱している・・・じゃなくて、幸一、先生にそんなことしていたの？　いくらロボ好きだからって、迷惑かけないでよ。恥ずかしい。あとでとっちめてやる！
混乱からさーっと、冷静になり、即座に怒りに変わる。
「先生ありがとうございます。なんで幸一が朝から私と登校しない

かわかりました。あと、数分で幸一を正気に戻しますので少々お持ちください」
笑顔で言う。
「だ、ダメです。正気に戻るのは広美さんアナタです。れ、冷静に！」
先生の話たぶん聞こえていない。それよりも、一刻も早くあのロボオタクを目覚めさせなくては。
なお、上機嫌続行中の幸一には私の心の怒りには気付いてない――。

「き、起立！　礼！」
恐怖に震えながら先生はホームルームを終わらせ、教室から逃れて行った。
「幸一。何時も朝からしていることと、なぜ上機嫌なのか説明して」
静かに言う。
幸一は青ざめたまま静かに答える。
「そ、そんな怖い顔で言うなよ。吉野上先生怖がっていたぞ。先生怖がらせるなんて――。」
「答えて」
「ひっ！　き、昨日新しいお客さん来て、俺の事を褒めてくれたんだ。そ、それ、それだけだ。別に浮気とかしてる訳じゃない」
「・・・幸一にそんな度胸ない。そーか、新しいお客さんね。だれ？」
「綺麗なフランス人のお姉さん。良いじゃねーか、きれいな人に褒められて嬉しがるくらい」
両腕ばたつかせながら必死に訴える。これぐらいなら、別に問題ない。大事じゃなくて良かった。それに幸一の立場が私なら、カッコイイフランス人のお兄さんが来ればたぶん同じ行動起こす気がする。
本当に頭打ってなくて良かった。

「そう。良かったじゃん。てっきり、頭でも打っておかしくなったと思ったから。それぐらいなら許容内」
「許容内って言っても既に手遅れじゃねか！　いきなり拳骨一撃は無いだろ！　マジで痛いだから」
「それぐらい勘弁して。帰りおごるから」
笑顔で言う。
「ぐっ！　・・・それなら、それなら、許してやる。次がら気を付けろよ」
単純な奴。笑顔と、おごるぐらいで許してくれた。
でも、いい人だから喧嘩したときぐらいしか使わない。利用してるとか思われたくないから。

放課後。
駅施設内ある小さな喫茶店に私と、幸一といた。ここ最近できたばかりで、おじいさんンが経営していて、日中は結構繁盛しているけど狭い。
そこでアイスコーヒーを飲みながら話していた。
「まぁ高いの言えないし、これが妥当だな。ここ気に入ってるし」
「許して。まだお小遣いの日まで少しあるから」
「・・・別に」
ぶっきらぼうに言う幸一。
「幸一。どするの？　夏休み」
それに対して、目の前に迫ることを聞く。
「夏休みか・・・何も考えてなかった。遊ぶことも、受験の事も」
「・・・ダメじゃん。それは」
せめて遊ぶことぐらい考えてほしい。まるで昔のことを思い出す老人みたいな発言は止めてほしい。
「ただ暑いだけ。俺、暑いの苦手なんだよ、冬のが好きだな。熱中症覚悟で遊ぶ気がわからない」
真面目な顔で話し出す。

「ちょ、長期休暇だよ。せっかくだから――」
「犠牲の上の休暇だと思ってる奴どれぐらいいるんだろうな？　広美」
だんだんブラックな表情に変化していく幸一。悪い性格が出てきている。
すぐに私は話題を変える。
「そ、そうだね。それよりも、昨夜のフランス人女性の話聞かせて」
「あ、聞きたい？」
「うん。聞きたい」
急遽転換。上機嫌だった朝の幸一を思い出し、例のフランス人女性の話に不意を衝くように聞く。効果てきめんだ。華やかな表情になり、重苦い話から一気に楽しくなった。
良かったことだけど、なんか複雑。
「俺がいつもの場所で演奏会をしていたら、金髪の背の長い女性が階段から降りてきて、真っ先に俺を見てくれたんだよ。ほっそりしていて、中々の美人だった・・・気、持ってないから！　持ってないから！」
「大丈夫、わかってるから続けて」
「何曲か唄いたかったけど、バッテリーと無理ばっかりしているし、とりあえず一曲だけ唄って終わった。そして、その人からお金取れるって言われて嬉しくなったわけ。
俺は金取ってる訳じゃないし、ただ楽しんでやってるだけだから・・・それだけ。また来るって言ってたぐらいかな」
それだけだった。何かあるかと思ったけど、何もなかったし、今の幸一の話だけじゃねぇ・・・。表情にも先と同じく曇りなく、嘘をついてるようには見えない。この話は紛れもなく本当の話だとみた。
「精進しなさい。他の客層も掴めるかもね」
励ます。
「お、おう。精進させてもらうぜ」

驚いた顔で言い返す。別に、大したこと言ってる訳じゃないのに。
「べ、別に、驚かせること言ってないでしょ。なんで驚くの？」
「いや、初めてだったから・・・広美に励まされるの。てっきり、励まさないタイプだと思っていて・・・それで、驚いた」
・・・えっ？　私励ましていなかった？　出会ってから、今日までの出来事を思い浮かべてみる。あっ！　全然褒めてもないし、ましては励ましてもいない。ただ習慣でしか見ていなかった。
「・・・ゴメン。結構すごいことだけど全く励ましたり、褒めたりしてなかったね」
「・・・謝られることしてないよ。むしろ、特殊な俺に付き合ってることに対してゴメンって言いたいよ」
「と、特殊じゃないよ、才能だよ。胸張って幸一の彼女だって言える」
右手を胸に押し当てて言う。
「・・・ありがとう」
それを少し複雑そうに、見てるけど見ていないような、別な何かを見ているような、変な視線で私を見ながら言う。
「そ、そんな悲し顔でありがとうって言わないでよ。ほら、いつものように楽しくいこう」
久しぶりに見る幸一の悲しい顔、原因はまだわからないけどたまに変なことを急に言いだして、遠い何かを見ているような視線で私を見る。まるで、近いけどかなり遠い所に私がいるみたいに。
まるで私が無理に幸一のそばにいて、邪魔なのに付き合ってくれる。と、考えてしまうほど。
「あ、あ、そうだな。悪かった。もうこんな時間だし、帰るか」
店の時計は十九時を回っていた。門限自体は無いけど、やっぱり早く帰ってた方がいい。
「そうだね。帰ろう」
二人分のアイスコーヒーのお金を払い、一緒に店を出た。

タッ、タッ、タッっ、二重に足音を立てながら並んで帰る。
空はまだ明るいけど、太陽は完全にビルの向こう側に沈んでしまった。
互いに喋らずに黙々と歩き続ける。
無意識に幸一の左腕に私の右腕を絡ませようとした時、さっ、と左腕を離されてしまった。
――拒否られた。
「ゴメン。気分じゃない」
先以上に悲しいそうな顔で私を見ながら言う。
「う、うん、わかった」
そのあと、一度も会話を交わさずに別れた。

多分、明日はよくなって会うはず。こうして一日が終わったことは何度もある。明日を信じて私は誰も聞こえないように、幸一が作った唄を奏でながら家路についた。

◇　　◇

◇　　◇

「ど、どするんだよ！　あの魔王をそのきにさせて」
「わ、悪い。許してくれないと思うが、許して」
倉庫整理後の帰宅途中、俺と一之宮は言争い寸前で状態で、酒飲み魔王の宮崎さんについて話し合っていた。
このままじゃ俺と一之宮、今月は完全に死ぬ。財布的に死を受けることになる。
新入社員歓迎会後の二次会、そのた飲み会、営業課長以下ほぼ全員被害、魔王の餌食になている。一番慕っている一之宮も例外ではない。むしろ最大の被害者だ。
「許して言ってもな・・・」

許せても、先は決まっている。
「割り勘でなんとかなれば良いけど。あの人の飲み方異常だからな――」
「あえて高い店で、ざるでレベルで飲むことないのに」
苦笑する二人。
互いに新入社員歓迎会後の悪夢を思い出す。
全国チェーン店の居酒屋で夕方から夜まで歓迎会して、大体閉めに近づきだした時だ。井上課長が、
『本日はお開きで！　全員解散！』
と、いきなり叫んだ。
てっきりこの後二次会でもあるかと思っていた俺等は、思わぬ発言に驚いてしまった。
ほかの人と社員も一斉に立ち上がり、課長の後を追うように個室から出ていく。これが、この営業のやり方か？　と、出ていく一人を捕まえようと立ち上がった刹那、宮崎先輩が俺の手を掴んだ。
「皆忙しいからね。一之宮さん、武市君。私達だけでやろう――」
運が尽きた瞬間だった。
帰れたのは朝方、始発から三本過ぎた時だった。これほど電車の定期券があって良かったと思ったことはない。それほど彼女はヤバイ。ヤバすぎる。
「ハァー」
二人同時に溜息を出す。
そんなこんなで、駅に着く。
自動改札に定期を入れ中に入る。
降りる駅は違うものの、路線と、方向は一緒だ。ともに階段を上り、ともにプラットホームに並んだ。
「なんで着いてるんだ？」
「定番な一言いうな。方向が一緒だからだ。それに、この時間は快速の本数が多いからだ。文句ある？」
「・・・ない。悪かった」

そのあとしばらく会話を交わさず、数分後に定刻通りに流れ込んでくる電車に二人同時に乗り込んだ。
出発まで三分後。時間調整と、特急通過の為だ。
意外と空いている車内。椅子に腰かけ、互いに向き合い、宮崎先輩の件について再び話し合う。
「もう一度聞くが、どうする？　宮崎さん」
「・・・飲み放題で勘弁願うしかない。逃げた武市もとっ捕まえて、道連れにしてくれる。それで三分の一、万事解決」
「良案だが、奴の腕時計見たか？　新品になってるぞ」
「な、何！　・・・あっ！　そう言えば、休憩中に他の課の女子社員と時計見せびらかして・・・。ったく、これが逃げ出した理由か。逃がさん」
逃げずにいればよかったものを、逃げたこと後悔させやる。
「私も協力しよう」
一之宮も乗り気だ。これで勝てる。
席から立ち上がり、右手で握手する。
「共線だ。いっちょやるか」

次の日。
一之宮の誘いに乗った武市を倉庫に呼び出し、二人で囲んだ。
「ぼ、暴力反対！」
「手を出すつもりはない。財布に対しての暴力は行使するが」
倉庫の角っこ追い込まれてい武市に不気味な笑顔でささやく一之宮。これがお前の性格か？
「その暴力に対してだ。嫌だ、死にたくない。あの夜のこと思い出させないで！　こんなことになるなら、時計なんか買わなかった」
半狂乱になりかけ、叫びまくる。
――ここまで追いつめるつもりはなかった。そこまでトラウマになっていていたとは。
「・・・だから、協力求める。被害を最小に防ぐためにも、武市の

参加が重要なんだ。少し前、宮崎さんのこと気になるって言ってて
じゃない。取り持ってあげる」
普段言わない言葉を際限なく言う。尊敬できる人、嫌な人の境目
にたつ人だけに一之宮は混乱していると思う。
単純に断れば済む筈なのに・・・。何故ここまで？
「一瞬の気の迷いだ。酔いと同時に覚めたよ」
「そこを何とか」
「無理だ。断れよ。三人でも持たない」
だんだん泣きそうな顔になってくる。いたたまれなくなってきた。
「一之宮ここまでだ。止めよう」
止めようとする気持ちに持っていくのに迷いは無かった。これ以
上やったら脅迫になりかねない。
「佐々木・・・だな。――せめて、教えてほしい。なんで、そこま
で嫌なんだ？」
壁に追い込み、ぎりぎりまで迫っていた一之宮は二歩下がり、何
時もの冷静な言い方で話す。
「さ、三十万ぐらい飲みに行って、貢ぎまくったのに・・・・全然
振り向いてくれないからだ」

――本当にいたたまれない。ダメだ。

この時だけ、俺と一之宮の気持ちが一つになった。
武市を解放し、倉庫で二人壁に項垂れる。
「可哀そうなことした」
「俺もだ」
――逃げるな誰も。
そして、仕事始めチャイムがなり二人仕事場に戻った。

歩行者６（後書き）

一章の後半に入ります、急いで書きたいんですが全く落ち着かねぇ！　書ける時間が一日一時間あれば良い状態です。十月からは出来るだけペース上げたい（願望）。

今書いてる話以外にも何作品か書いています。クリスマス前までに投稿予定です。楽しみにしてください。

楽しんでもらえれば幸いです。

歩行者7（前書き）

突貫小説製作者の鷹崎です。
今回は宮崎さん活躍の回です。前回、前々回ともに職場内では悪評高き人ですが、仕事は人一倍できます。一応、設定だと超名門大学卒になってます。あとは、想像にお任せします。
佐々木だけの視点ですが、どうぞ見てください。
皆さんに楽しんでもらえれば幸いです

歩行者7

「一之宮。この仕事上手だろ、私の代わりにしてくれないか？　手が空いたらの話だけど・・・あっ、ハイ、こちら営業一課の、宮崎です。はい、先日の件御受けに・・・ありがとうございます。

佐々木、手空いてる？　午後二時だけど？」

電話右手、左目は一之宮、右目は俺。人間ができる範疇を大きく超えてる・・・ひ、左手はパソコンのキーボードを叩いてる。

「その時間なら、会社に帰る時間・・・空いてます」

「良し！　井上課長。例の一件、横波運送に話しつけました。二時に話し合いをしたいと今連絡きてます。課長にも話したいと言ってますので、回線まわします」

課全体がざわめいた。超大手の横波運送、中東方面に大きく展開している最強の貿易会社だ。毎日『小さな引っ越しから、大型郵送まで全部お任せ。まず電話一本から』と、一分近くのＣＭ放映してるほどの巨大企業。

俺達の会社よりも圧倒的な低価格、定時運送、絶対的信頼で高い業績を誇っている。しかも、シーレーンの力なく独力航行で海賊地帯を幾度も突破していて、幾度も返り討ちにしているとも聞く。逃げ出すと言われる・・・沢山の逸話が横行する会社だ。

「ほっ、本当か？　宮崎」

「ええっ、今日佐々木と一緒に挨拶に行ってきます。私は、沢山仕事があるから、この先佐々木に任せるつもりだから、顔を覚えさせる為にね」

思わぬ宮崎先輩の一言、思わず立ち上がらずにいられなかった。

「えっ？」

「おっ、いい反応。見ての通り手一杯だ、結構手空いてる風に見えたから・・・そろそろ、胃に穴が開きそうな仕事任せても問題ないてね」

「そ、そ、そんな！　俺は・・・」
「私の尊敬してる人の一言だと、三か月以上働ければ、大きな仕事こなせるってね。だから、根性ある佐々木に任せた。それに、結婚前提だからな・・・クビになったら捨てられたらたまらんし」
真剣な眼差しの向こうに見え隠れしている下心と信頼、同時に察しとれる。ここは逃げたらお終いだ。
「・・・俺できますか？」
「出来そうだから言ってるじゃない」
「・・・わかりました。俺やります」
小さく笑い。課長の向けて一言。
「聞きましたね課長。今後横波の一件佐々木をリーダーにしてやります。容認できますか？」
「宮崎さんが言うなら・・・良いでしょう。佐々木、任せたぞ」
即答で俺に向けて言う。
この時点で俺はとんでもない位置に立ってしまった。まだそんなに会社に来て日が経ってないのにリーダに選ばれた。快挙か、それとも何かしらの悪いこと？　それとも夢？　全員に見られないように右足で左足を踏む。
痛い。夢じゃない。
「・・・ハイ、頑張らせてもらいます」
と宣言した同時に一斉に拍手が起こる。一之宮、武市もしている。
武市は越されたなと、少し鋭い目で見るがすぐに優しい何時もの目に戻り、一之宮は尊敬の眼差しで俺を見つめてる。
拍手はしばらく止まなかった――。

怒涛の朝は過ぎ去った昼下がり。暑さが支配する時間帯を宮崎先輩と一緒に、先方先の横波運送へと足を進めていた。
巨大ビルが建ち並ぶオフィス街、弱小企業の俺達じゃ到底一フロワー借りるのも不可能な場所だ。そこに先方の会社がある。
覚悟してきたものの、やっぱり胃が痛い。対等に渡り合え存在な

のか不安になる。
「緊張してるのは佐々木だけじゃない、私もだ」
察しられたのか、ただ自分の不安をもらしたのかどうかわからないけど・・・少し不安が消えた。
そしてデカい自動ドアを潜り、目的地へと進んで行った。

顔合わせは十五分程度で終わった。当初の予定では三十分だったんだが、何かしら緊急の知らせが入ったので要点を言い合う形で終幕した。
終始腰が抜けそうな状況、隠すのがやっとだった。それに引き換え、宮崎先輩は恐れることなく、自分よりも二倍の身長差のある担当の人と渡り合っていた。
――正直、本当に一年違いの人なのか？　本当は年齢誤魔化して、数年やってじゃないか？　と、思う。
「それにしてもあの担当、図体デカかったな。厄介専門でも回してきたと思った」
「・・・厄介専門？」
「そのうち嫌でも分かる」
もう慣れたよって、言いたそうな小さな笑み。
「はぁー、わかりました」
それなりに宮崎先輩も気なっていたんだなと、それだけ印象的だと思った。

そして俺達の会社に戻り課長に内容を知らせ、各自自分達の席に戻った。
「どうだった？　先方先」
溜息を出しながら椅子に座る同時に一之宮が顔俺に向け、乗り出してきた。
「どうもなにも、互いに協力しながらやっていくみたいな話だよ」

「・・・つまらんな。上手くやっていけるか心配だよ」
左右に顔を振る。
「・・・悪かったな」
と言い、今日やり残した仕事を終わらせるべくＰＣを立ち上げ、作業に入り込んだ。
「まぁー良い、時期に上手くやるか」
励ましたか、けなしたのか分からん事を言って一之宮も作業に戻った。

それから二時間後。
残業かけてやっと終わった。
荷物をかき集め席を立ちあがった時、宮崎先輩も同時に立ち上がり俺に話しかける。
「終わったか佐々木？　終わったならちょっと来てくれないか」
手招きしてくる。
取りあえず無言のまま宮崎先輩の席に行く。
「例の飲み会の件なんだが・・・・」
不意を突かれた。予測していた筈なのに、先輩の活躍に感心していて忘れていた！　迂闊だった。
「は、ハイ？」
「無理してしなくていいよ。私も少しは自粛しないと思ってね。やりたいんなら、いつでも誘ってくれ、楽しみにしおく――、あっ、一之宮が帰ろうとしてるよ。送ってやれ」
荷物の整理を済ませ、立ち上がる一之宮を指さす。
「えっ、で、でも」
「先輩命令だ。ちゃんと送るんだぞ」
顔を目の前にまで近づかせ、念を押すように言う。今まで見たことのない気迫に負けて言う。
「ハイ。送らせてもらいます」
宮崎先輩に見送れて一之宮と同時に会社を後にした。

一之宮も思わぬ事態に驚き、何時もの活発な話し方はせず、終始無言のままだ。俺も同様。
駅が近づく。
やっぱりこの状況は嫌だ。俺は思わずこんなことを聞いた。
「一之宮。なんで俺の事を好きになったんだ？」
「っ！」
声までは出さなかったかった物の、反応は大きかった。
「・・・遂にその質問が来たか」
「気になってな。そこまで俺に執着するする理由を聞きたい」
何かしら進展させないと、今後も一緒に仕事をしていく仲としてぎこちない関係は避けたい。せめて、理由ぐらいなら。
「・・・佐々木が歩いてるからだ。それだけ――」
一之宮は恥ずかしがる様子も見せず、堂々と俺に向けて告げる。何事も揺らがぬその想いを隠すことなく。
「えっ？　それだけ？　それだけなのか？」
思わぬ理由に足が崩れそうになる。意味が分からない。当たり前の事で、なんで俺が対象者になるんだ？　一之宮は俺を馬鹿にしているのか？　怒りが立ち込め始めた刹那。彼女が言う。
「色んな人が居るんだよ、この世界には」
最初意味がわからなかったが、俺も子供じゃない。一之宮が言った言葉、その思いはすぐに理解できた。
「おっ――、一之宮、お前、まさか」

「佐々木と歩くために、私奇跡を起こしたんだよ。歩き始めて約三か月、それ以前は絶対に歩けないと言われた少女」
俺達を避けるように歩く人ごみ。
まるで俺達だけ時間が止まったみたいだ。
そんな中、一人笑顔で俺に告げる一人の女性。

俺は、そんな一之宮を静かに見るしかなかった。
こんな不甲斐ない俺が、彼女の対象者に、そ、そんな馬鹿な。
「い、一之宮・・・・」
「奇跡を起こさせた責任取ってくれ、一馬」
と、言い残し、一之宮は人ごみに紛れるように改札を抜けて行った。今追いかければ追いつくのに、その場で動けなくなった。

歩行者7（後書き）

宮崎先輩の一言で大きな仕事をもらった佐々木。仕事頑張れっと、言いたいです。

一之宮の思わぬ告白。佐々木の心が少し揺れました。どうなる事とでしょう・・・。

二章めから本格的に歩く話になっていきます。皆で力を合わせていくメンバー達に応援をお願いします。

以上鷹崎徳でした。

歩行者８（前書き）

どうも突貫小説製作者の鷹崎です。
今週の話をとうぞ！

歩行者8

日本にやってきて一週間経った。
最初は駅で覚えた不安で、この国でやっていけるのかどうかと、何度も考えた。
でも、フリスが残してくれた言葉が私に勇気をくれる。アナタが住む事を憧れたこの国でやっていけるガイドが、何度も救ってくれた。
特に『日本人は礼儀正しいと、考える人は多いと思う。しかし、我々は人間だ。礼儀正しくない人もいる。忘れるなよ』と、考えてみれば当たり前な言葉でも私は嬉しい。
みんな同じだと言う例えが好きだ。
『うん。流石だアリサ。別の国だからって恐れることは無いよ。ただ言語が違うだけ、色が違うだけ、背丈が違うだけ、それだけだ。そんな人身の回りにたくさんいるだろ？　君もその中に入れ――大丈夫だ」
何度も繰り返される私への励ましの言葉。
私はまだやっていける――。

夜、私が最初にこの町で利用した駅へ向かう。
ノーマネーストリートミュージシャンの演奏を聴きに行くためだ。
不思議な演奏法で唄い、私を圧倒させた。芸術の街の出身者である私をだ。
地元に住む知り合い他、他人様でもすら芸術性が全くないものには絶対に関心を得ない。しかし、ギターの語り弾きならぬ、ロボットの語り弾き――並々ならぬパワーを感じだ。
ただし、聞いてから三日後に気付いた。
色々考えながら歩いてるうちに、例の駅に着いた。一週間の間に地理を固め、迷うわないようにしておいて良かった。

我ながら感心する。
更に近づくと、音楽が聞こえてくる。
間違いない、彼が居る。
少しワクワクしながら近づいた時だ――この世と思えぬ悲しい声と、今まで聞いたことない音楽が響いていた。
別な人かと思ったが、最初に出会ったロボットが立っている。間違いない。

ああああっ！　俺うぁー！　なんてこと、してしまったんっ、だ！

そんなつもり、全く、無かったの、に！

彼女を、彼女、彼女を、彼女を傷つけてしまったんだ～～～～俺は、やってしまった。

傷つけた！　傷つけた！　傷つけた！

心を～～～～やった！　ああああ～～～～！

俺は、彼女する資格がない！　あの子幸せにする資格が無い！

彼女は俺が好き、俺は、分からない。答えが浮かばない。

確かに、側いれば楽しいのに、それは恋と呼べるのか～～～！

と、もはや唄ではない、ただの叫びだ。
本当なら離れても誰も私を非難する人は居ない。しかし、あまりにも悲痛すぎ声、あの夜とは真反対だ。
それに、泣き始めている。

嫌な事があったんだろう。泣き始めながら唄い続ける少年に近づき、ハンカチを差し出した。
「酷い唄ね。取りあえずこれで涙拭いて」
私を見て、少年は驚き演奏を中断した。

互いに目を合わせるように簡易椅子に座り、彼の相談に乗る。
声は何度も途切れ、日本人ではない私にはしっかり聞き取れなかったけど、恋で悩んでいるのだけは分かった。
「お、俺は・・・広美こと、どう思ってるのか・・・確かに、か、彼女だけど」
「・・・彼女！　恋人いたの！」
失礼ながら叫んでしまった。正直、こんなロボットを作るような人に恋人など居るはずがないと、先入観で判断していた。
「失礼な！　俺だって彼女いる！　悪かったな」
更に目に涙がにじむ。
「ご、ゴメンナサイ――で、その彼女と何があったの？　話を聞くくらいなら出来るわ」
また涙あふれそうな目で私を見ながら詳しく話し始める。
「確かに広美は優しいし、俺が気付かない所を助けてくれたりして・・・良い奴なのは分かっている。だけど――それが、俺にとって真剣に広美ことを愛してるのどうか、正直な分からない。現にも、今日の夕方広美が腕を組んできたけど、払ってしまった。そ、それで・・・お、俺は」
「ストップ。深呼吸して・・・ゆっくり話して」
混乱している。今日含め、まだ二回目しか会ったことしかない相手に色々話してくる。よほどため込んでいたとみる。
「す、すみません。
――今の気持ちが、広美に対してちゃんと愛してるか、してないか」
「話を裂くようで悪いけど、はっきりしたいんだよね？　愛してる

か、していなか」
今の展開で行くと、無限に続きそうな予感がしたので、きっぱり言う。
「あ、そ、そうです。そうなんです・・・どっ」
「おっ！　幸一じゃないか、やっぱり居たか」
聞き覚えのある声が駅構内から聞こえてくる。
少年と私、同時に声がする方へ向いた。
「アニキ！」
「佐々木一馬！」
日本に来て最初の夜に化け物と間違えた人と思わぬ再会をした。
別れ際にまた会うと言ってたことはあながち嘘ではないと、震えと同時に感じた。
「シャツを着ている事は、どこかで務めているの」
「貿易の方で、ちょっと」
「ぼ、貿易！」
「営業だけどな、アニキ」
「・・・確かにちょっね・・・」
話が脱線しけど、少年の顔色が良くなったので良い休憩だと思う。
しかし、あの男と面識があったなんて世の中狭すぎよ。ビックリしたじゃない。
「俺みたいな能じゃこれが限界だ。でも、それよりも先顔蒼ざめていなかったか？　何か切羽詰まるような話し方しているみたいに見えたけど。俺でも良かったら話聞くぜ」
「っ！　アニキ」
思わぬ申し出に驚く少年。一見、何も出来そうには見えない男だ

けど、それなりに何か見ているのだと思った。
ゆっくりと口を開け、男にも話し始めた――。
「そゆう事か。面識薄いけど、俺は十分に広美さんを愛しているように見える。俺は大丈夫だと思う」
曖昧な答え方はしない、この状況では正しい判断。
「私もよ。それでも判断がつかないなら、いい方法あるわ・・・聞いて」
確認する意味で、アニキと言う男に話している少年言葉を聞きながら思いついた事を言う。正直、成功する可能性は低いけど、やったら意外と成功する可能性もあるから。
「判断するいい方法？」
困惑する少年に向かって、私は今出せる最高の笑顔で答える。
「彼女の顔スレスレまで近づいて、頬っぺたを両手で触りながら更に近づく・・・それで、ダメなら、そこで別れて。ダメじゃなかったら、あとは自由よ」
「はっ？」
男二人呆けた声で言う。
だから男は！　男の馬鹿さは万国共通なの？
「用に、アナタは彼女に触れたこと無いでしょ？　付き合ってるなら少しなら良いでしょ、それでもなら別だけど・・・ねっ」
少年は黙り、考え始める。
今まで感じたことのないこと無いのか？　男緊張した、顔で少年を見続けている。
「・・・良し。あいがとございます、明日早速試してみます・・・それではこれで」
と言い、素早く荷物を集め、ロボットとこの場を去った。
私と男、二人残されて男が先に口を開いた。

「確信あるのか？」
「無いわ。どっちにしろ、あの子が決める事よ」
「子供に向かって根拠のない話を、酷いな」
「思い悩んでいたのよ。重症なのを応急処置したのよ」
静かな言い争いが少し続いて、先に喧嘩を売った男から話を切り上げた。
「・・・悪かった。俺が悪い。確かに・・・俺だけじゃ、ちゃんと言えなかった。ありがとう。
それで、申し訳ないが聞かせてくれアナタの名前？」
切り上げがてら私の名前を聞くなんて、礼儀の正しくない人。
名前は長いからこれだ言う。
「アリサよ。私を呼ぶときはこれで言って。一応言っとくけど、私は結婚してるわ」
「安心しろ、間違ってもそれはない。人生史上最悪に女運ない俺にそんな気はならん」
きっぱり言われるとなんか嫌だ。
「なら安心ね。遅いから帰るわ」
「おう。また会える日まで」
佐々木一馬から離れる際に、フリスの言葉を思い出す。
『フランスでも世間は狭い。なら日本なら・・・恐ろしいぞ』
佐々木に気付かれぬように、微笑んだ。

◇　　◇　　◇

一睡もせず朝を迎えた。
夜中広美に『朝早く来てほしい』と、短いメールを送って以来眠気が全く来なかったからだ。
怖い。昨日したことで愛想尽かれるていないかどうか考えるだけで頭が痛い。それに、もし尽かれていなくとも、俺がダメだったら・

・・・。
昨日相談に乗ってくれたフランス人のアリサさんと、アニキ。二人は問題ないと言ってくれたけど、それでも完全には不安が消しきれない。
広美自身と俺自身同時に考えないといけないなんて、嗚呼この苦しみから解放されたい、早く楽になりたい。
時計が午前5時を回ったのを確認して家を出る。父も母も誰もいない。二人とも忙しいし、兄は製薬会社で新薬の研究で遠い田舎で暮らしている。行ってきますと言ったのはいつの日か。
ぼやいても仕方ない。家のカギを締め、ズボンに入れて走り出した。
到底歩いて行く気分じゃなかったから――。

早朝の校内は静かだ。
何時もなら何かしら喧騒な声が響き、先生たちが大声出したり、逆に先生に対して大声出したり・・・あの状況なら広美は輝いているし、優しい。けど、ちゃんとした二人っきりだったとき、俺は広美を見て愛してると言えるのか？
俺と広美関係。広美からの告白から始まった。
ちゃんとし二人っきりじゃなく何人か隠れていて、俺が良いよと、言った瞬間数発のクラッカー音が俺達を歓迎した。
よく考えれば、二人きりになれた記憶がない。
いや、俺が避けていた。恐れていたから。最近よく分かったんだ。
遅かったけど、気付けた。
冷静に考えれば考える程避けていた・・・。ひょっとして、おれ広美見ていない？
見ているけど、見ていない。
深い絶望と、恐怖。あの優しい笑顔を振りまく広美を、振り回している可能性がある。傷つけた可能性がる。

腕を組むのを拒否した時、俺は絶頂に困っていた、不安だった。
俺は決意する。
アリサさんが教えたことをして、何も起きなかったら俺別れる。
これ以上、広美を傷つけないため、最小に食い止めるために！
「さ、幸一。お、おはよう」
決意を改めた時、広美の声が教室内に響く。
いつもなら俺に挨拶した同時に、広美の友達が集まってきて『朝からお熱いですね～』
とか言ってきて、冷やかすのに今日は居ない。
完全なる二人っきりだ。
「な、何の用？」
「ちょっと近づいてくれ」
「？　良いけど」
首を傾げ、困惑した表情で俺に近づいてくる。
短期決戦。長期戦にもつれ込めば絶対に不可能、覚悟を決める。
俺の近くに着た瞬間、体勢を屈め、身長を広美の高さにして、目を合わす。
驚いて、のけ反ろうとしている広美を逃さないため両手を頬っぺたに固定して広美を見た――。
大きな黒い瞳に、ちゃんと整えた眉、両手に伝わる頬の暖かさ・・・俺が好むセミロング髪形、俺が一回しか言わなかった事をちゃんと覚えていて、実行している。
アリサさんが言ってくれた通、問題なかった。杞憂だった。

――俺は広美を愛している。心から。

心の中で笑い、戸惑っている広美に言う。
「広美愛してる。まだ長い道だけど、一緒に歩いてくれ」
悩み晴れ、すっきりした気持ちで広美に気持ちを伝えた。
困惑していた広美も理解してまぶたに涙を浮かばせた同時に、唇

を合わせた――。

誰もいない教室で、プロポーズみたいな愛の告白をした。

まぁ――このままでプロポーズにしても問題ないか。

と、思い、外から何時もの喧騒がやってくるまで唇を合わせ続けた。

◇　　◇

次の日何時ものように出社し、社員証がタイムカードになっているのでそのままタッチする場所にタッチして、ピピっと、小さな音を鳴ったのを確認して下駄箱へ入った。

内履きに履き替え、社内に入って休憩所差し掛かる前よりも前に、騒いでいた。

何事だと、急いで俺も休憩所に向かう。

休憩所は四方形の空間に作らていて、小さな円形のテーブルと、小さな椅子が四つずつテーブルに合わせ設置されている。そこになるまだアナログ表記されている小さなテレビが一台。そこに食い入るように、全テーブル、全椅子に座りながら各署の人が集まりテレビを見ている。

「佐々木こっち来い、詳しく話してやる」

宮崎先輩が小さな声で俺を呼ぶ。

「何があったのですか？」

「横波のタンカー。ロケット弾数発受けたそうだ。昨日の緊急な、意味はこれだったんだ。納得だわ」

ろ、ロケット弾！

「でっ、船は？」

「安心しろ、魚雷二発受けても沈まないと言われる横波のタンカー

だぜ、ちゃちぃ装備しか持っていない海賊の攻撃などかすり傷だぞ」
業界内での噂話、あながちウソではなさそうだ。
笑っている先輩を横目で見ながら胃痛を覚えるのであった。

そして、その日から一之宮を見る度に、今まで感じたこのない気持ちを覚えるようになった。
多分、昨日の奇跡を起こした責任を取れと言われたせいかも――。

歩行者８（後書き）

申し訳ありません。今の実力じゃこれが限界です。更なる向上のため、努力していく所存です。

次回は、一章の最終回です。今まで以上のボリュームで行く予定のため、再来週に投稿します。楽しみにしてください。

楽しんでもらえれば幸いです。

歩行者9　前編（前書き）

どうもー、突貫小説製作者の鷹崎です。一章の最終話前篇をお送りします。

初期予定では前後なしで行くはずだったんですが・・・投稿者である自分の周りが一気にゴタゴタな状況になりまして、急遽応急処置として分けて書くことにしました事をご説明いたします。

以上、一つの区切りを楽しんで下さい。

歩行者9　前編

恐ろしいニュースを知ってから十一時間後。
日の長い夏の空もいい加減暗くなってきた。
俺と、一之宮は相変わらず残業に追われ、終始キーボードーを叩く音が鳴りやまなかった。
ったく、無限に湧いてくるゾンビか！　いつになったら終わるんだよ。もう。
心の中で、一之宮に聞こえないように叫ぶ。そして、気付かれないように隣にいる彼女を見た。
俺と同ようにキーボードーを叩いていて、ディスプレイを真剣に見つめている。何時もの変わりない動作なのに、なんか・・・絵を見ているみたいな気分になる。
『昨日の奇跡を起こした責任を取れ』と、言われて以来少し心境に変化が出てきていることに気付くのに一晩もかからなかった。
変化じゃないかも、ただ気付くのが遅かっただけかもしれない。あんな、プロポーズさへ受けなければ、この気持ちになるまでそんなに時間がかからなかったのに・・・俺が鈍いのか、一之宮の暴走のせいか――。
何か混乱しそうになったから考えるの止める。
ゆっくりと姿勢を戻し、一之宮から自分の席に視線を戻し、小さく溜息を出した。
――しかし、何時俺が一之宮に奇跡を起こしたのか？　一体何の奇跡を起こしたのか？全く身に覚えのないこと、いくら思考しても思い浮かばない。ただの口出まかせ・・・の仮説を立てたが、あれ程ストレートに想いをぶつけてくるのに出まかせなんてありえない。
それでも分からない。
やはり、本人に聞くしかないか。

俺は再び仕事に戻る。一之宮とタイミングを合わせるためだ。多分、俺よりも先に進んでるだろうし、俺もやらないとダメだからだ。
スパートをかけるべく、最後の集中力でディスプレイと睨みあう。

「おっ、佐々木も仕事終わったのか？　なら一緒に帰ろう」
普段なら二時間かける仕事を三十分で終わらせ、クタクタになりながら一之宮と同時に立ち上がり、声をかけてもらう。
こんな無茶なやり方はしばらく出来ないだろ。必死だったからやり方が思い出せん。
「ああっ、良いぜ」
荷物をまとめて鞄に入れ、二人同時に営業課を出てる。
会社には誰も居ないのか廊下の電灯は消され、非常口を示すライトしか照らされていなかった為、薄暗い。
そんな中を二人肩を並べ歩く。
静かな社内に響く足音が二人しか居ない事を決定着ける。
玄関を抜け、来た道を戻る。
「なあ、一之宮。俺、何したんだ？　何の奇跡起こしたんだ？」
単刀直入に聞く。
「私と付き合えば教える」
迷いも無く答える。
「・・・結婚じゃないのか？」
「ランクを下げれば、振り向くかなと思って」
ニヤッと、微笑みながら答える。全然諦める気が全くない一之宮に恐れ入った。
「ら、ランクってオイ・・・全く、諦める気無いな」
「一度決めたら走りぬくのが私のやり方だ」
「やり方ね・・・まぁ良い。それよりもこの後、暇か？」
「私を誘うのか！　佐々木！」
期待のの眼差しで俺を見る一之宮。先までの知的な感じは消え去り、完全に別人、今ままで一度も見せたことのない子供のような表

情で俺に迫る。
「お、落ち着け一之宮。君が考えているような誘いじゃない。会わせたい人が居るから誘ったんだ。そんな表情で迫るな！」
思わぬ展開に上ずった声で否定する。
「な、なんだ・・・期待して損した」
子供のような表情から一転、肩を落とし、目を細め、ささっと先に行き始めた。
凄い変化に驚き声が出せなかったが、まるで俺が全部悪いと言いたいみたいな喋りに次第に怒りが立ち込めてくる。が、何時こと、深呼吸して気分を整え、追いかける。
「期待させるような発言は謝る。だが、今の行動は――」
「人の気持ちを一方的に知っている奴が何がだ。それよりも、その会わせたい奴に会わせろ佐々木」
「ぐっ！」
――これ以上言ったら負ける。直感的に察した、
「・・・分かった。着いてこい・・・」

一之宮に会わせようとしている人は幸一と広美さんだ。面白いカップルだから、交流でも持たせようと思ったからだ。
取りあえずこのこと伏せといて、何も言わず、近所の駅に二人で降り立った。
何時もながら最終前は人が多い。人をかき分けながら階段を上り、改札を抜け、幸一がいる出口に向かおうとした瞬間・・・全身を震えさせるような音楽が耳を貫いた。
――昨日以上に破壊力が上がっている。
周りにいる人達もどんな反応すれば良いか分からず悩んでいる。
上手いと下手の中間を上手にとらえている以上、分からん。
「佐々木。まさか、この歌の元に会わせる訳じゃないだろ？　そう言ってくれ」
「・・・そのまさかだ」

冷静な一之宮が恐れている。
な、何故こんな・・・あっ！　昨日恋人の事で悩んでいたな。まさか上手く行かず、自暴自棄でこんな甘ったるい曲を唄ったているのか。
可能性がでた同時に罪悪感が生まれる。アリサの無責任発言が最悪な事態を発生させたことになるなら、俺もその一人だ。せめて謝罪しないと。
「・・・行くぞ。何時もならこんな唄じゃないから安心して次会えるから」
半ば強制に近い形で一之宮を連れて行く。
不安の色が途切れない一之宮。俺もだ。
二人同時に階段を下り、曲の根源を見た――え？
何時ものロボを真ん中に、腕を組みながら陽気に唄う男女が見えた。幸一と広美さんだ。二人が一緒に唄っている。
笑顔だし、すごく楽しそう。
そして、この瞬間、やはり幸一の考えは杞憂だったんだと思えた――。
「あ、嗚呼！　やっ、やっぱりまた会ってしまった。会ってしまった！」
急に震えだし一之宮がうずくまった。
「ど、どうした？」
突然の事態。一体何が起きたんだ？
取りあえず手を伸ばした瞬間握られ、勢いのまま立ち上がった。
「大丈夫だ。ただショックで、びっくりしただけだ。あの二人とは間接的に面識がある。覚えてるかどうか分からないけど」
「えっ！　あるの」
「最終逃した時、近場のネカフェでね。突然、後ろからロボを連れて来店したわ。流石の私でも逃げるしかなかったわ。また会いそうな予感はしていたけど・・・佐々木と面識があるなんて、ましては、私から会いに行くなんて」

饒舌なる一之宮。よほどショックだったんだなと思える。しかし、一之宮とあの二人が面識があるなんて微塵にも思わなかった。世間は狭いという言葉も近場で使うものだな言える。

！　あの人は――。

震える一之宮から目を離した同時に、ロータリーに隠れながら二人を見ている人影を見つけた。

金髪で、長身。目立つ服装。日本人ならぬオーラ。間違いない。昨日の事を心配して着たのか、たまたま通りかかって見てしまったのかは分からないけど、確かに居る。

ラッキーと言う単語を使うならここだろう。

これで皆紹介できる。

「紹介するから着いてきて」

一之宮の手を引いて、階段を下りる。

「えっ」

予想していない俺の動作に驚く一之宮。引っ切り無し凄い反応に、彼女も一般的な女性だとちゃんと思えた。

この時だろう、決心ついたのは――。

「その感じだと、上手く行ったみたいだな」

二人の目線に入る同時に話しかける。

「・・・アニキ！」

「さ、佐々木さん！」

唄を中断し驚く。

「紹介したい人が居るから少し付き合ってくれ」

俺の右に立つ一之宮に右手を差し出して、

「俺の同僚の一之宮・・・下の名前は？」

俺としたことが、名前を聞いてなかった。慌てて聞く。

「結理。ゆは結という漢字で、りは、理科の理。それだけよ。ここでちゃんとした自己紹介させてもらうわ。

私の名前は一之宮結理。佐々木一馬と同僚だ」

笑顔で、凛とした顔で二人に言う。
「俺の名前は鮫島幸一。鮫島はそのまま、鮫、島の漢字で、幸は・・・全部そのままだ。大して変な漢字は使ってない。よろしく。隣にいるのが、俺の彼女・・・いや、恋人、大切な人の――」
「壇ノ浦広美。苗字は、壇ノ浦の合戦に使われるものだからそのまま、広美は一般的な広と、美しいの美です。こちらこそよろしくお願いします」
次々に自己紹介を進め、広美さんの紹介が終わった同時に幸一が持っていたマイクを取りロータリーに隠れているアリサに向けて一言。
「アリサさん。隠れているの分かっていますよ。出てきてください」
きゃっ！　と小さく叫び、顔を出す。
「な、何で分かったの？」
「バレバレです。アリサさんも自公紹介して下さい」
「わ、分かったから、マイクで言わないで！」
車に気を付けながら俺達の所に駆けてくる。
「ハァハァ・・・まったく。私の名前はアリサ、フランス・パリ出身で・・・ハァ、何もないわ・・・ゴメンナサイ」
呼吸が乱れている。自己紹介に少し酷だったからこれ以上聞き出せなかった。

俺、一之宮、幸一、広美さん、アリサさん。円を描くように簡易椅子に座り皆で話し合うことにした。
「えーと、何話しましょうか？　別に議題決めて討論するわけじゃないんで・・・」
「あっ！　思い出した！　あのネカフェいた人でしょ？　一之宮さん」
一之宮が先話した事と同じだ。広美さんも思い出したんだ。
「ええっ、そうよ。あのときはロボで驚いてしまったわ、あのロボ

何なの？」
「幸一はＵ－０２と言ってますが、正式名は二足歩行型ＭＰ３です。二足歩行出来て音楽記憶媒体備えたロボです。ただ単純に音楽を覚えるだけの何でもない奴ですよ」
「広美、その言い方はないだろ。これ作るのにどれだけかかったか知ってるのか」
一之宮の質問に正確に説明する広美さん。ロボ関係には興味なさそうに見えるけど、それなりに知識はある。それだけ幸一ことを見ているんだと思う。
それに反して幸一は不服そうだ。
「知ってるよ。中三からだったからって言ってたでしょ。約三年の集大成、私が忘れると思う？」
「忘れてないなら良い・・・じゃなくて、何も出来ないみたいな言い方をよせって言ってるの」
「何も出来ないじゃない。何時もトラブルだらけで――、昨日はリモコントラブル、一昨日は安全装置トラブル・・・三日前が」
「や、止めてくれ広美ぃ！」
目を閉じ、記憶の中からロボトラブルを思い出していく広美さん。必死に制止させようとしている幸一。
それを端から見る俺、一之宮、アリサさん。三人目を合わせ頷く。
――若いねー。
と、思った同時に、一之宮とアリサさんが話し始めた。
二組が話し出したので俺は取り残されてしまった。しまったと思った時、幸一と広美が俺に手招きしてくる。動き見て小さい、アリサさんと一之宮に気付かれないようにしているみたい。
二人に近づく。
小言で広美さんが話してくる。
「あれが悩みの種の一之宮さん？」
理解した。
「・・・そうだ」

「結構美人ですよ。中性的な所が魅力的です」
「中性的・・・男混じりとも言うが」
「・・・鈍いって言われます？　典型的ですよ」
「仕事の面なら一之宮に鈍いと言われている」
「・・・・」
しばらく沈黙する広美さん。顔に出すくらい考えて再び話し出す。
「私は一之宮さんと一緒になっても問題ないと思います」
「一回だけしか会っていないから言えると思う。同じ仕事場で、同じ会話をしていれば相手の良し悪しが分かる。結構くせのなる人だぞ」
キッパリ答える。が、これは嘘の事だ。大事な想いは簡単には話さない。
「ううっ。そんな考えじゃ、誰とも付き合えませんよ」
「心配ありがとう。でも今は気分じゃない。仕事が忙しいから――それよりも、上手く行ったみたいだな幸一、この感じだと」
二人を見ながら微笑む。
「あっ――そ、そうだ。昨晩は相談に乗ってくれてありがとうございます。ただの考えすぎだったみたいです。杞憂で良かった」
幸一の目線が広美さんに注がれる。
「あっ、そうだったんだ・・・こちらこそありがとうございます。ここの所様子が変だと思っていたら、そういうことだったんだ」
納得するように頷き、幸一と目を合わし、同時に二人も微笑む。
小さな幸せが周りを包み込もうとした時、一之宮が話の輪に入ってきた。
「何話してるんだ？」
「恋愛相談の結果を聞いている」
「何！　佐々木お前、そんなこと出来るのか？」
「成り行き上昨日、相談会になったんだよ。な、アリサさん」
一之宮が俺達の話に割ってきた事は孤立している。一人にならないように、素早く話を振る。

「そうよ。この世と思えぬ唄で叫んでいたから・・・するしかなかったのよ」
やれやれと言うか、仕方ないと言うような言葉を言いながら幸一を見るアリサさん。その視線を感じた幸一は頭を下げる。
「すいませんでした・・・あの時は気が悩んでいたもので」
「謝るのは私じゃないわ、隣にいる広美よ。間違えないで」
頭を下げたまま広美さんの方を見る。
「俺の気の間違いで多くの人に迷惑をかけました・・・ゴメンナサイ」
アリサさんに話を振った途端幸一の反省会になってしまった。頭を下げ続けるその姿には自責の念を感じ、哀愁までも見て取れる。不味い、このままじゃ公開処刑だ。話を変えよう。
「気にするな。頭を上げろ。反省会はこれにて終了だ」
手を叩き幸一の頭を上げさせる。
「アニキありがとうございます・・・そうだ。お礼に何にか奢りますよ、アリサさんも、一之宮さんも、皆奢り――」
「断る。俺達は子供じゃない」
幸一の申し出を断る。未成年に金出させたら立場がない。
「嬉しいが、俺達は大人だ。出す方はこっちだ」
笑顔で理由を言い、丁重に断った。
「ありがとうございます。なら、俺が店用意しますよ。ちょっと、待ってて下さい」
これで話を終わらせようとしたが、幸一は携帯を持って立ち上がり、俺達から離れる。こんなつもりじゃなかったから、俺は慌てて立ち上がり追いかけた。
「ま、待て！　俺達はそんなつもり――」
「会社御用達の店に話しつけました。皆集まれる日が正式に決まったらまた連絡してくれと言われました」
な、なんてことを！
笑顔で俺達に手を振る。

「会社御用達って、鮫島君・・・鮫島！　ここの辺で」
一之宮が立ち上がり幸一に人差し指を向ける。
「遅かったですね。改めて言いますよ。鮫島重工の社長で父、鮫島幸喜の次男鮫島幸一です」
「やっ、やっぱりだ！　何か引っかかると思ったら――ぐっ！」
「気になる所だが話を変えるな一之宮！　幸一、俺達はお前にお礼をさせるつもりはない、店に断りの電話を入れろ」
話が混乱する前に一之宮の口を右手で押えながら、幸一に言う。
「で、でも・・・」
「掛けろ。混乱する前――」
力を込め、再び言うした時、宮崎先輩の飲み会の事を思い出した。やらなくても良いと言われた物の一応頭の隅で考えていた。これで、安い料金で満足させられる！　魔が出るってこう言うものか。
「撤回。電話するな！　丁度良かった、厄介事回避できる。飲み会だ。飲み会が安くで出来るぞ一之宮」
口を塞がれ不服そうな顔で俺を睨んでいた一之宮が、今の俺の言葉で眼が輝き始めた。同じ気持ちで過ごしていたからこその幸福感。
俺の手を跳ね除け、幸一に迫る一之宮。
「ありがとう！　君は私達の希望だ！」
先の話は無かったかのようにはしゃぐ。
理解できない幸一と広美さんとアリサさん。三人とも俺達の見たことのない動きに恐れ、あわあわしながら口々に言う。
「じゃ、やるってことで良いですね？」
「何があったか知らないけど、良かったわね」
「良かったじゃん幸一。二人に喜んでもらって」
解放感と幸福感に包まれている最中、一気に現実が着た。
「えーと！　何の集まりだが知らないがそろそろ解散した方が良いぞ」
俺の背中に威厳のある気配を感じる。
すぐさま振り返り見た――。

初老と中堅らしき二人の警察官が立っていた。初老の方は笑顔だけど中堅は笑っていない。初老の方が喋る。
「夜分も遅くなりそうですし、明日も早い、帰った方が得だと私は思う。楽しい会話は明日に取っときましょう」
軽く言ってるが間違いなく警告だ。
残り全員一斉に立ち上がり、荷物をまとめる。
「すみせんでした。今離れます」
代表で俺は警察官に謝り続ける。

「これにて失礼します」
「夜道に気を付けて」
初老は終始笑顔で、中堅の方が終始無言のままだった。
適当に荷物を集めた俺達は一旦駅を離れ、荷物を確認し合う。
「忘れ物ないな」
皆頷く。良かった。
「取りあえず解散しよう。あの二人私たちが離れるまでずっと見ていたから、長居しているとまた来る、今度こそややこしくなるぞ」
冷静に一之宮が言う。
「賛成だ・・・幸一、携帯貸せ。俺の番号教えるから。アリサさんは持っています？」
ここまで来たからもう何も教え合わないわけにはいかない。せめて、連絡手段は確保しときたい。
「良いぜアニキ、ほら」
「ゴメンナサイ。まだ、この国の連絡手段持っていないの。番号だけ教えて頂戴」
幸一は高校生だけにちゃんと持っていたが、アリサさんはまだみたいだ。赤外線通信で交換し互いに情報を共有し、アリサさには俺と幸一と一之宮の番号を書いたメモを渡した。
「何かしら連絡手段が決まったら連絡してください」
「ありがとう」

これで全員連絡手段を確保した。
軽い知り合いから、それなりの知り合いになった瞬間でもあった。
それからすぐに解散し、幸一は広美さんとアリサさんと一緒に帰り、俺は一之宮を送ることにした。
駅までで良いと言ったが、家まで送ることにした。
「何故送る？」
「俺の勝手だ」
「来なくていい」
「勝手に着いて行く」
「ストーカー」
「お互い様だ」
妙な言い争いをしながら一之宮の家を目指す。
「寒い。近づくな！」
「お前から近づいて来るのに、俺からはダメなのか？」
「ダメだ！」
「無視発動」
「無視するな！」
「・・・・・」
誰が異様な視線を向けようが関係ない、誰かが俺達を止めようとしても関係ない。俺はこの状況を楽しむ、止めれるなら止めてみろ。
と、心の中で豪語した時一之宮の歩みが止まり振り向く。
「私が佐々木を困らせから復讐してるのか？」
真剣な表情。目つきが鋭い。これは冗談で言ってる様子はじゃない。
「違う、好意でやっている。そなことで復讐する時間などない」
俺も真剣に返す。
「そ、そうか・・・好意・・・！　好意だと」
二度好意と言った同時に急に走り出す一之宮。予測不能の事態に後れを取った俺だが、中学の時から鍛えた足で追いかけ、一分経たずに確保する。

「早すぎだ。少しはゆっくり来い」
「悪かったな」
互いに息が荒く、立って息を整える。
異様な光景なのか？　通りかける人はヒソヒソ話しながら、おもっきり避けながら行く。「完全に不審者だな私達」
「お前、一之宮が走ったからだ」
この場に残っていてもまた警察来る可能性がある。完全に回復していないが、再び歩きだす。
今度は無言のまま、肩を並べながら歩く。
一定に響く足音。
気付けば周りには誰もいな、二人だけだ。
先の喧騒は嘘のようだ。
このまま――。
「ここだ」
「はっ？　あっ、ああ」
人差し指を宙に向けて言う。
すぐに指の先を見る。小さな木造の建物が建っていて、静かに引き戸の玄関の豆電灯が光っている。
「実家だ。ここまで来れば気が済むだろ？　帰れ」
「・・・分かったよ。じゃぁ、また会社で」
強引に任務完了、一之宮で良かった。他の奴だったら間違なく通報される。
背中を向け振り替えらないふりして歩き、十歩進んで一之宮の実家の方を見たら玄関に入ろうとしていて、振り替えてった一之宮と目があった。
「振り向くな！」
「お前もだ！　・・・また明日」
「ああっ、言われなくても」
と、いい残し十歩離れた場所でも聞こえる程のピシャ！　大きな音を出しながら閉める。

相変わらず愛想のない奴だ。奴に振り向く男は簡単にはいないだろ。近くにいる俺が言うから、確かだ。そんな中俺を除いて。

やっぱりだ。今夜一之宮と過ごして分かった！　俺は間違いなく惹かれだしてる。最近ではない、ずいぶん前からこの兆候は出ていた。あの口調と行動が、そんなわけないと俺自身で気持ちを封じ込めていた。

ちゃんと整理して向き合えば、あのプロポーズ事件も難なく乗り越えれたのに。

一之宮の家から離るにつれ、更に何かが込み上げてくる。やっぱり、近くにいるだけでこれだけ違うんだ。近くに居てもらわないとそんなわけないと思えないし、否定できないし、何も言えない。

『いずれそうなる』決め台詞が浮かんでくる。

そうなりましたよ。全く、ちゃんとしてれば――。そろそろ決着つけないと、俺の気持を出さないと堂々巡りなどしたくない。

最終が駅のプラットホームに流れ込んで、改札を走りながら通過した時、決意した。

――向き合おう。一之宮結理と。

歩行者9　前編（後書き）

どうでしたか？　念願の総力戦が出来て、自分なりに満足していますが・・・やっぱり何か足りない気がします。もう少し、会話文増やそうかな？　まだ計画、途上段階を常に行き来しまだ不安定な状態ですが、どうぞ次回楽しみにしていてください。通常通り週一で投稿します。

楽しんでもらえれば幸いです。

歩行者9後編（前書き）

どうも突貫小説製作者の鷹崎です。一章の最終話をお送りします。

歩行者9後編

あの騒動から一夜明けて、私と佐々木は出社直後の宮崎さんに昨日ことを話した。
「飲み会の件は別に良かったのに・・・まぁ、どうしても言うなら参加させてもらうよ」
やれやれと言い残し、宮崎さんは自分の席に行った。
取りあえずこれで飲み会の方は片付いた。このことを佐々木の知り合いの鮫島君に教え、日程と段取りを決めればもう大丈夫だ。
「俺が幸一に連絡しとくから」
と、朝礼が始まる直前に私の肩を叩き、佐々木が伝える。
「分かった。頼んだぞ」
「任せとけ。あっ、幹事は一之宮がやれよ。俺がやるよりは上手く出来る筈だ」
「別に良いが、やったことないぞ」
「俺もだ。だけど、こういうの得意そうに見えたから推薦しただけだ」
「責任転嫁？」
「違う。頼りにしてるんだ。いずれ幹事マスターになるかもしれないから」
「漢字、幹事・・・馬鹿にしてるのか」
「それも違う・・・いずれそうなるかもな」
「あっ――さ、」
「朝礼始めるから静かにしろ一之宮、佐々木」
突っ込み入れる暇なく井上課長の声が響く。
仕方なく声を止め、静かに涼しそうな顔している佐々木の顔を睨みつけ、気付いてる筈のに無視して課長の朝礼に耳を傾け続ける。
――何のつもりだ。
結局、朝礼は全く聞き取れなかった。まぁ、大した事はじゃない

から聞こえなくても問題ない。解散直後に佐々木にすぐに話す。
「何のつもりだ？」
「何のつもりでもない。ただ一之宮のことを信用してるから、頼んでるだけだ。問題あるか？」
「私を、し――！　信頼？」
慌てて佐々木が右手を差し出し、口を塞ぐ。
思わぬ発言に大声を出してしまった。佐々木の口から信用してると言われたの初めて、私の事を頼りに――信頼されてる佐々木に！
そう思った同時に顔が熱くなる。散々、否定の言葉を発し続けていたアイツからの言葉だと考えると。
「顔赤いぞ一之宮。朝から見せつけるな」
と、武市が冷やかしをいれる。
なっ！　有頂天になりかけてからの一言、佐々木の手を振り払い一言言ってやろうかと行動した時、武市だけではなく、課全体の視線を集めていた。
思いっきり恥ずかし事をしていた。
「い、一之宮大丈夫か？」
「な、なんとか・・・」
こうして、入社して最大に恥ずかしい朝を迎えた。本当に迂闊だった。

昼休憩、宮崎さんと一緒に外で昼食を取ることにした。
最近できたばかりの蒸し料理のお店で食事したいとお誘いがあったから、断る理由もないから着いていく事にした。
多分、今朝の事も聞きだすつもりだと思うけど、隠す気もないし、何かアドバイスもらえるかもしれない。
色んな事を考察しながらついて行き、川辺に二階建ての白い外壁で造られ、各所ガラス張りになっている小さな建物が見えてくる。
「ここだ。雑誌のヘルシーなお店特集で載ったお店だ」
「綺麗ですね」

ガラス戸を引いて店内に入り、店員に二人だと伝え、川が見える一番いい席に通してくれた。
座る同時に店員に宮崎さんが雑誌に書かれていたおすすめを注文し、奥に引っ込んだのを確認して、早速今朝の事を話し始める。
「進展してるね」
「宮崎さんがアドバイスをくれたお蔭です」
「どういたしまして。でも、ここまで行けたのは一之宮アナタ自身、自分で進んだ道よ胸を張って良いわ」
「そんな・・・」
「謙遜止して。ルール無用の戦いにそんなのいらない、勝ちたいならしない」
「はい」
「この調子ならあと一歩まできてると思う。押し倒すぐらいの勢いで行けば簡単に落ちるわ、多分だけど」
真剣な顔から急に、急に何か企みを秘めた笑顔で私に話し始める。
「押し倒す？」
「そう、押し倒す。既成事実さえ作れば勝ち、責任で結婚せざる――」
「そこまでしてまでも佐々木と一緒になりたくないです」
「・・・そう。私の身の回りはこれで結婚して人大勢いるわよ。ルール無用だから」
笑顔がなお黒く輝く。
私を黒い世界にでも入れたいのか？　それとも馬鹿にしてるの？
時に、この人の心理が全く分からなくなる。
「そんな怖い顔で私を見ないで。冗談よ。ように、もう手助け必要ないって事ね」
何時もの優しい笑顔に戻るが、先の黒い笑顔は本物だ。いくら冗談よって言っても説得力が無い。
「そうですか？」
「うん、大丈夫。あとは一之宮がどう動くかが重要よ」

「私次第・・・」
「その通り。無理せず積極的に動きなさい」
宮崎さんからの最後のアドバイスをもらった同時に料理が運ばれ、そのご佐々木の話題を話すことは無く、別の話で盛り上がった。

午後五時半。今日は私だけが残業になった。
佐々木は例の横波運送の話し合いが終われば直接帰宅するとお達しがあったので、つまらない残業になりそうだ。全く、顔ぐらい見せろよ。
一人心の中で言う。別に声に出しても誰も聞きていないが、空しくなりそうなの止めとく。
誰も居ないオフィスで響くのはキーボードの叩く音と、電子音。どれだけここが昼間喧騒の真っただ中だってことを嫌でも分からせるこの状況、逆に落ち着かない、静かすぎると。ましては佐々木が居ないと――。
「よっ、仕事してんな一之宮」
「最後まで語らせろ！　フラグもへったくれもない！」
突然現れた佐々木に思わず叫ぶ。それに、何言ってるんだ私？
「お、落ち着け。俺はただ忘れ物取りに来ただけだ。取ったらすぐに帰るからな」
様子が違う私を見て慌てながら自分席に行き、茶封筒を取って「じゃな！」と、一言言って退散して行った。
やらかした――二人で帰れるチャンスを変な事言ってオジャンにしてしまった。完全に一人になったオフィスで思いっきり溜息と、肩を落とした。

仕事は七時に終わり、精神的に疲労が溜まった状態で退社する。
外は暗い。夏の夜でも時間が来ればすぐに暗闇になる。そんな中、一人で歩き出そうとしたら。
「結構速かったな。流石一之宮」

会社の門にもたれながら私を待っている佐々木の姿があった。
「な、佐々木？　帰ったんじゃないのか？」
「帰る気が失せたから、ここで待つことにした。それに飲み会の事も話したいことあるし、待っててもいいよ」
帰る気失せたからって二時間近く待つか？　おかしいぞ佐々木？
私同様に壊れたか？　色々言葉が浮かぶが、何も喋れない。
「何も言うこと無いなら帰るぞ」
「おおっ・・・」
それからは佐々木が一方的に話を続けながら一緒に帰る。飲み会は宮崎さんが大丈夫だと言った日で確定し、見せてもらった店の写真を見てみると忘年会と新年会で使うような店じゃないとか色々話してくる。
こんな饒舌な佐々木は多分初めてだ。
「な、わけよ。一之宮はどう思う？」
「いや・・・別に問題ないと思う。良いじゃないか」
「良し、幹事が言うなら問題ないか。それじゃ、最後に一つ。飲み会のある日の昼間、買い物付き合ってくれ。買いたいものがあって、一之宮に決めてもらいたいんだ。良いか？」
「別に問題ない。付き合ってやろう」
「じゃ、朝十一時に一之宮が誘った店がある駅で」
「わかった。そこで良いんだな？」
二回頷いて、確認した。
こうして一緒に電車に乗り、佐々木が降りる駅の二つ前で降りる。
何事もなく佐々木の乗っている電車は出発してあっという間に、プラットホームから姿を消した。
佐々木との約束を頭の中で復唱した時、気付いてしまった。これは――。
「・・・朝の十一時か・・・・！　こ、これって、も、もしかして・・・で、デッ」

二章に続く。

歩行者9後編（後書き）

すいません、中途半端ですがここで一章を終わらせてもらいます。派遣先で大規模な人員整理があった為、緊急引っ越しと、仕事探しが始まりましてゴタゴタが最大になっています。

集中できない・・・・。

こんのまま書いても酷い作品になりかねない。一旦区切ろうと決めました。

落ち着くまで休みます。早くて十一月の中旬には復活できるかもしれない。最悪年末までは何とかしたいです。

ちなみにこんな状態ですが、来年練度一気にあげて賞狙い行きたいです。今じゃ絶対にむりですが、なにかしらつかめた気がします。

必ず帰ってきます。それまで待ってくれると幸いです。

以上、鷹崎徳でした

歩行者　二章プロローグ（前書き）

どうも突貫小説製作者の鷹崎です。三シリーズ同時投稿のメインになる歩行者シリーズ二章のプロローグです。
メインキャラの心境を書か着ました。
佐々木一馬の夢を見てください。

歩行者　二章プロローグ

「よく頑張った武市。あと一歩だ」
「ありがとうございます真理様」
「今更様嫌だ。同期じゃないか、宮崎先輩で良い」
「で、でも・・・」
「一晩で三十万以上も貢がせたって、私の名誉を穢したお前に逆らうこと許されない筈だが」
「申し訳ありません」
広い屋敷の一室で、私の執事を任せれている武市が何度も頭を下げる。いくら、一之宮と佐々木に取り囲まれたからって、常識はずれの額を要求するような事があるか。酒代くらい私で出せる。
「謝る暇があるなら言え」
「でも、お――」
「直属の上司は私だ！　お父様は関係ない」
「か、かしこまりました宮崎先輩！」
「良し！　許そう。私はこいう事を言ってくれる武市が好きだ。早く返事が聞きたい」
数か月前、私は武市に愛の告白した。当時小さいころに患っていた病気が再発し、病院に入院していた。忙しい執事業の中武市は入院していた私の所へ毎日来て、私の世話をしてくれた。それで、良き夫は彼だと決め退院と共に車中で言ったのだ。
「私のような一介の執事に・・・そんな事」
「男だろ！　腹括れ！　今すぐ婚意届持ってくるぐらいの気合入れろ！」
「か、かしこまりました！」
と、いい残し武市は慌てて部屋から出て行った。
全く、若い執事としては上級なのに、男としてはいまいちだ。告白聞いて以来肉食動物に追い込まれた小動物如く、恐れおののく男

に成り下がり、常にビクビクしている。ダメだな、私が居ないとな。
「ハハハハハっ――？　あれ？」
笑い出した途端、妙な悪寒を感じ、まさかと思う。本当にまさかだよな？
携帯ですぐに武市に連絡するもののかからない、悪寒感じているのに汗が出てくる・・・あっ、冷や汗か。
何時もなら冷静でいられるのに、今日はなんか落ち着かない・・・先の発言が気になる。
そして三十分後。恐れていた事態が現実になる。
武市が差し出す紙には、『婚姻届』とはっきりと書き記されているものだった。コイツ本気で来た！
「・・腹括ります。僕もあなたが好きです。こんな僕ですが、結婚してください」
――この馬鹿野郎。持ってくるのが遅い！　早く括れ！
「・・・全く、遅いぞ。さっさと書いて役所行くぞ」
「ハイ、かしこまりました」
と、一気に書き上げ、残すところは同意者名。この一項の二名表記さへ終われば晴れて法律上結婚だ。
――書かせるのはもちろんあの二人だ。これを起爆剤にする。
「良し、決行は飲み会前の日中だ。二人を探し出すぞ」
「ハイ」

俺が気付かぬうちに、こんなことが起きてるなど知るはずがない。知るのは飲み会当日だから。

◇　◇

◇

――死への巡礼者は優しく微笑み、私事を好きだと言ってくれた。
深夜病院から抜け出し、裏手にある小さな丘の大きな木の下、満月の夜で。
そして、翌日。新しい診断がでた。
「診断だとあと三カ月だってさ」と、笑いながら私に伝え。何事も無いように接してくる。
何故笑っていられるの？　あっと言う間に死んでしまうのよ？
何で私に愛の告白してくるの？　理解できなかった。
そんな私に彼は「死の予定が分かればペースが分かる。予定が作れる事は名誉なことだ」と、何度も何度も理解できない言葉を私に伝え続ける。
そんな私を察したのか、寂しそうな表情で見て。
「予定せず死ぬ人間が多い世の中。こういった状況下の方が幸せかもなって、そう伝えたかっただけだ。理解しろって言うのが無理かもしれんが」
確かに予定せず死んでいく人の方が圧倒的に多い。ニュースを見ていて、死亡と言う単語が出ない日は無い。あれば奇跡なぐらい。
でも、それでも私は、
「理解できない」
と、答えるしかない。
「――だろね。現にも君は僕手を強く握りしめてくれる。それだけで、それだけで理解してくれてないのは分かるよ。理解してくれない事は愛の印だ。逆に嬉しいよ」
白く、細い右手を伸ばし、私の頬に優しく触れる。
私もその手に両手で包み、彼の体温を感じ取る。冷たい。
「フリス、私はどうすれば良いの？」
「君は、まだ大丈夫だ。日本に行く勇気はあるか？　あるなら、行ってほし。僕が夢見た街で君が、笑顔で生きてくれる。それが望みだ・・・・」
「・・・わ、分かったわ。アナタが言うなら、私」

「住む部屋の手筈は済んでいる。あの街に住む為のマニュアルをこのダイヤリーに用意している。読めば大体は分かる筈だ」
と、私の頬から手を離して白い枕から一冊の黒いダイヤリーと、小さな鍵を渡し。微笑みながら言う。
「僕が生きてる限り、この先日本で生きる為に必要な事を教えるよ。どんな些細のことでも全部」

◇　　◇

早朝四時半、鮫島工場第一区画、第一ライン。
巨大ベルトコンベヤーとロボットワームが静かに佇むエリア。そこに幸一が寂しそうにそのラインを見つめている。
ほんの数日前に、現場監督者と親父である社長との協議でこのライン取り壊しが決まったからだ。
老朽化と基準を超える騒音。いくら改善してもなおらないし、酷くなる一方だった。それに、原因不明のラインストップ。非常停止プログラム誤作動にストップ。連日起きれば仕方ない事だ。保全の疲労と生産の事を考えればいずれこうなることなど想定出来た。
でも、俺が物心着く頃からこのラインはあったから、Ｕ－０２もこのラインで生まれたから・・・。
「寂しくなるね」
と、後ろに優い高い声が聞けて来た。
「高坂班長」
このライン作業者を統括する高坂さんだ。就職してすぐにこのラインの稼働になり、配属されて四十年。ラインと共に生きた人だ。油で黒く汚れた作業着とヘルメットが物語る。
「幸一も来たか」
「・・・ハイ」

「まだ現役なんだけど・・・仕方ないな。ああ五月蠅いと」
「声じゃなく手で合図してましたからね・・・あれで皆話せるから凄い」
「それに止まられると生産力落ちるからな。これも仕方ない」
「・・・仕方ないですね」
そう仕方ない事だ。問題が改善されなければ一からやり直す。解体して新たな物を作る。これが流儀だ。安全第一、作業者の安全を守る事だから。
「稼働停止は八月中旬だ。多分週末の夜勤終了後だろう。見納めに来るか？」
「もちろん行きます。俺のロボを完成させてくれたラインですから」
「夜は眠いぞ」
「覚悟も上です」
きっぱりと言い切る。
「だろうな、何時もの詰所来い。盛大にしやげるぜ」
俺の顔を見ながら苦笑して、高坂さんが言う。まだ俺が小学校入学前に無理言って稼働中の工場に入る時に、許しを得る所で見せるのと同じだ。全然変わっていない事だ。
「ありがとうございます」
頭を下げ、出来るだけの感謝を込めた。

◇　　◇　　◇

幸一はあの時以来から、付き合い始めた時よりも優しくなった。
最初は絵や、小説に出てくるような程のぶっきらぼうさで。笑顔など全然見せてくれなかったけど・・・今はどんな些細な事でも笑ってくれる。
――たまに退くけど・・・。

強引な所も露骨なまでに出て来て、二人っきりの時は要注意しないといけないな。力は私よりも圧倒的に上だか。でも、多少なら問題ないけどね。

でも、最近少し寂しそう。

演奏会後、佐々木佐さん達と話して解散してから訳を聞いたら、近々あの二足歩行型ｍＰ３を作ったラインが撤去されると言った。

――仕方ないと、呟いていたけど・・・全然仕方なさそうに見えない、納得してるように見えない。

私の家に幸一が遊びに来た事を思い出す。

一台のノートＰＣに描かられている新作のロボの説明されたっけ、あまりにも熱弁すぎて止めてなんて言えなかった。正直ウンザリしているのに・・・。

今まで失敗を活かした力作で、軽くて丈夫で、配線も少なくして、ＩＣＵも最新機種を使用し、ＯＳも万全だって・・・そこまで言ってあんな知らせ受ければね。私だってへこむ。

あのラインでこれを作りたいのは明白、それを知ってるのは私だけだと思う。

でも、私だけ知っていても仕方ない。それじゃ意味がない。

このまま幸一はこれを抱えたまま終わらせるかな？　ううん。そんなはずがない。望んではいないはず。

――仕方ない。また幸一の言葉が浮かぶ。

決められたルールを越える事は許されない。

安全第一は絶対尊守。

現場の絶対理念だよ。これらを破ることは作業者の安全を損なうからいくら愛着のある機械だからって、認められない。

社長なんて継ぐ気ないって言ってる割には、ちゃんとした事を言ってる。まぁ、物心着く前から工場に行き来してるって笑顔で教えてくれた時に、完全に工場の人間になるなと思ったけど。

一度でもないのかなチャンス。

せめてあのロボ作るぐらい稼働させてもいいのに。

別にどうでも良い筈なのに真剣に悩む私は、幸一に毒されてしまったのかな？　腕組みしている自分の姿を等身大の鏡を見て思う。

――彼氏の夢を応援するのは彼女の役目。

昔読んだマンガの一節を思い出す。

野球弱小校が甲子園目指し、日本一を目指すベタベタなスポ根作品で、主人公はピッチャーで、ヒロインは案の定のマネージャー。

暇つぶしに古本屋でパラパラと適当に見ていたら、この言葉だけ私を引き込ませた。

友達、教師、親、近所の人達が、ヒロインを囲み「もう諦めたらどうだ？　練習試合三回もコールド負けして、予選も大敗をするだけだ。彼らを説得できるのは君だけだ」と、皆が言い浴びせてる。

のに、彼女はケロっと笑い。「彼等と、彼氏の夢を応援するのが彼女の役目。そう、私は応援している以上、止めろなど言えない。私から言わせたいなら覚悟して下さい」と、朗らかにあの仲間に私の大切な人が居て、それを妨げるなどしたら何をするか分からないと全員に脅しをかけたのだ。

思わぬ発言に驚き、野球部にアンチ等が消え去り、予選を迎える。けど、弱小は弱小、コールド負けではないが負け一回戦敗退するものの、強豪とたった一点差の０対１で、最終回まで翻弄させるメンバー達。

私は、この言葉だけは忘れないようにしようとした。

そして今思い出す。

はぁーっと、溜息を出して鏡の私を見て、マンガに出てくるマネージャーのキャラと合わせてみる。あの凛とした顔、劣勢の時も監督と共に突破口を見つけだそうとする姿、私にそれが出来るのか？

幸一を導けるのか？

――野球は出来ないけど、出来るように手伝えるのは私しか居な

い。当たり前だけど。
最後の試合時に当たり前こと彼女は言うが、好き事をするには色々犠牲がつく事を理解したメンバーは一丸となり、全ての感謝を込めて戦う。
――この言葉を思い出した瞬間、私は決心した。彼の夢を叶えようと。
導こうと。

◇　　◇

「ど、どの服が良いかな？」
飲み会当日。その日中にどこか出かけないかと佐々木に誘われた。今その準備の為、衣類系のタンスやクローゼットからあらゆる服を取り出し、鏡の自分に照らし合わせる。
「露出行くか？　いや、焼けるの嫌だし・・・清楚系で、薄い長袖で・・・フリル、好きかな。白？　黒？　スカート？　デニム？」
考えれば考える程組み合わせが分からなくなる。
こうなるならさり気なく好み聞けば良かった。なんて策なしだ。
携帯を取り出し、宮崎さんに応援求めようとするが、先日のランチの時に独り立ち宣言したし・・・もう、頼れない。こうなるなら・・・・、はっ！　と、思い甘えが残る自分の顔を叩き、活を入れる。
「もう、一人で出来る。誰も頼らないし迷惑かけない」
慎重に服を両手に掴み、合わせ、冷静に考える。
何時もは仕事用にシャツ系で、黒いパンツだ。急なお呼びがかかっても即時に動けるように構えている。休みの時も、佐々木と居る時も・・・男みたいに、緊張を・・・あっ！　その逆を行けば、意外性でイケるかもしれない。
意識して、集中して・・・・これだ！

全色白固めで、久々にスカート（ロング）で、長袖だけど・・・日頃、ファッションのこと考えてないことが裏目に出た。しかし、アイツだって同じだ。これだけで十分だ。
根拠なき自信で安心する私。
どうなる？

◇　　◇　　◇

一之宮、幸一、広美さん、アリサさん。中々個性的で、面白い人達だ。
出会えて良かった。
気を付けてないとすれ違い、すれ違う事もなく終わるような関係。出会う可能性が限りなく低く、殆ど奇跡。
先日の駅でのお話会は確実に奇跡だ。ロボオタ、その彼女、会社で俺にプロポーズした女、フランス人・・・奇跡だ。絶対にありえない。
そんな奇跡に近い出会いをタダのお友達関係で終わらせる気は俺にはない。数年に渡る歩行経験で常に思っていた事、超長距離歩行チーム結成である。
国と国を渡り、長い道を数日かけて、数名のチームで歩いて行く。
一見地味に見え、ただ歩くだけ、簡単じゃないかと思うが――、人間は常に二足歩行という無理な動きをしている。
本来なら四足歩行だったのを二足で動いてる。バランス取るのに力を使い、更に歩く負担倍増だ。
そんな状況で百キロ以上歩くんだ。体力と精神力が共に必要になる。それに、孤独でそれをやるのは辛い。同じ目標を持ち、同じ境遇であればどんな困難にも立ち向かえる筈だ。
そんなチーム作るには理解させるのが重要だ。しかし、幸一と広美さんは未成年だし学生だから無理は言えないし、一之宮は知的派

だし、アリサさんはまだ日本に来たばかり・・・そして、俺は馬鹿でかい共同プロジェクトの会社代表だし。
結束出来そうだが、全員事情がデカい。下手すれば法に触れる。
結束したとしても俺の構想に乗るとは思えん。
奇跡で出会たとしても、現実では奇跡は起きない。
俺的にも惜しい人達なのに、無理がありすぎる。
チャンスなのに、夢なのに、手に届きそうになると遠くなる。まぁ、それが夢なんだよね。分かっている。
分かっているのに悲観的になりそうだ。

――いずれそうなる。顔を上げ夜空を見たら、一之宮の言葉が聞こえてくる。どこまで入り込むんだ？　お前は？
いずれそうなるか、俺の夢も頑張ればいずれ夢は叶う、そうなるか・・・。

いずれそうなる。
いずれそうなる。
いずれそうなる。

一旦思うと簡単には消えない。脳内で反響する。
くっ！　消えやがれ！　声までストーカーか。
そんなに言わなくてやるよ。せめて話すぐらいなら問題ないだろ？　相談ぐらい、問題ないだろ？
目線を夜空からアスファルトの地面に下げる。夢から現実に戻すように。
現実を歩く。
夜空に描く夢を歩く。
為にも・・・嗚呼、前途多難だな。
また考えると気が重くなる。

――でも、行くしかないか。前へ・・・。

結局眠れなかった。今日は一之宮とデートなのに、飲み会なのに、夜空は少しずつ太陽の光で追いやられ少なくなって行く。

ここに居るのも何だし、待ち合わせの駅に向かう為プラットホーム入る為に階段を駆け上がる。

ほぼ一晩中駅に居たと正直話したらどうなるだろう？　笑うだろうか、馬鹿にするだろうか？　それとも心配してくれるか？　せめて驚くだろうか？

こうしてる間にも彼女の事を思う。

俺も相当毒されてるな、小さく微笑む。

定期で改札を抜け、始発が流れてくるプラットホーム歩く。

歩行者　二章プロローグ（後書き）

どうでしたか？　新章からは皆の夢と、佐々木の計画を書きて行きます。夢は夢のままで終わらせない、強い意志で叶える姿見てください。

投稿者である自分も今後も頑張ります。どうか、応援お願いします。

他の作品も頑張るのでそれもよろしくお願いします。

歩行者二章０（前書き）

お久しぶりです突貫小説家の鷹崎です。当初の予定よりも大幅に遅れたことをお詫び申し上げます。

年末に派遣先の変更、新たな仕事を覚え、帰省、等年末年始とも最大に忙しくなり到底書けるような状況でした。

少し落ち着いたので少しながら書きました。

約に二か月間のブランクを立って直しながら不定期で出していきますので、楽しんでもらえれば幸いです。

歩行者二章０

何時もの習慣は怖い、出勤の時と違って走らなくても問題ないのに駆け出してしまった。
乗れなくても問題ないのに――！
ダダダダっ、と、俺と同じように階段を駆け下りてくる足音、
思わず振り向き後ろを見たら。
「一之宮？」
出勤の時と同じ格好の一之宮が俺と同じ、否、それよりも早い速度で駆け下りてる。
「・・・佐々木！　何故この駅に」
「お前こそなんで始発？」
電車に駆け込みながら互いに疑問をぶつける。
そして、電車が走り出す。

◇　　◇
◇

安易な自信は捨てた。
早朝に決めた服を止め、仕事に行くときに着ていく服にして早朝の町へ飛び出した。　念には念を、始発で行けば間違いなく遅刻は無い。
変に着飾って失敗するよりも、何時もの服にして自信良く行った方が間違いない。それに相手は佐々木だ、ファッションなど気にしない筈だ。
勝気になりながら改札を抜けて、丁度プラットホームに流れ込んできた電車を見て思わず駆け出してしまい。
階段を駆け下りると、
「一之宮？」

先に走っている男が振り向きざま私の名前を言った・・・佐々木！
昨日と同じ服装の佐々木が先に走っている。
理解不能！
二人並んだ同時に言う。
「・・・佐々木！　何故この駅に」
「おまえこそなんで始発？」
言い合うように互いに電車に乗り込こんだ。
そして、二人乗せて電車が出発した。

歩行者二章０（後書き）

こんなものでスイマセン。

年末年始とも文学界に衝撃が走ってますね、次面白い話が出るのが楽しみです。

遅くなりましたが、今年もよろしくお願いします。

歩行者二章～飲み会集結編１（前書き）

投稿が遅れたことをこの場を持ってお詫びいたします。
お久しぶりです、鷹崎です。
年末から春までの間、危機的状況に陥っていまして死にもの狂いで戦っていました。
その間全く書ける状況でなかった。むしろ、書く気がしかったです。
でも、この話を持って少々復活したいです。
まだ何ともいえない状況のご時世ですが、楽しんでもらえると幸いです。

歩行者二章～飲み会集結編１

始発は快速でなく普通の鈍行、一駅一駅停まりながらゆっくり進んでいく。
そんな中、俺は昨日の事を何も隠さず話して朝まで駅に居た理由を伝えた。
「馬鹿か」と、言われ当然だなと心の中で嘆く。
「――で、朝まで居たと・・・理解できないな」
「出来ないなら良いよ、するな」
と、デートなのにらしくない雰囲気になる。
まぁ仕方ない、誘った俺が昨日と同じ格好していればやる気無いと見られて、低い評価を受けるのは。
「仕方ない、佐々木だから・・・まずは、服装を何とかしよう」
だから表現、俺だからか――
真顔でそう言う一之宮。批判の対象になるような状態であるが、お前も同様に仕事着で来ている
棚上げかよ！
「一之宮もな」
と、言い終わった同時に指摘する。
「！　・・・佐々木が言うなら、私もどうにかしよう」
気付いたか、それとも意図して俺に言わせたかどう分からないが、自分の服装を見て納得する。
「お互い様だな佐々木」
「・・・・ああ、そうだな」
笑顔で返す一之宮。
引きつった笑顔で返す俺。
何時もとなんら変わらないやり取りのまま、また次の駅のプラットホームに電車が入り込み停車する。

◇　　◇

朝日が差し込む工場内。
先の静けさが嘘のように大勢の人の声と、ライン稼働準備の為のに予備稼働させる機械の音で一気に騒がしくなり、ライブ会場匹敵の大音量の音が支配する。
まさに工場らしい。
慣れてないとうるさいけど、次第に心地よいメロディーに変わる。

午前八時にお約束の体操の音楽が流れる。
詰所と言われる休憩所兼事務所から沢山人が出て来て広い所に集まり、音楽取りにする人もいれば、別のストレッチする人もいる。主に若い手だ。
その中に遅れて一人、幸一が入り込む。
「おはようございます」
「おっ、おお、今日は幸一入るのか」
隣にいた中山さんが声をかけてくる。飛び散る鉄くずを防ぐ黒い防護メガネ越しに目で笑った。
「ハイ、軽いバイトですけど」
謙遜して言う。
「彼女の為か、若いね」
「っ！」
「・・・仕掛けたつもりだったんだけど、図星か。頑張れよ」
また目で笑う。

山中さんは見た目はイケメンで、物覚えが良くて、将来有望されているが・・・中身は変人だ。初めて出会った時「初めまして」とかじゃなくて・・・「この機械どうよ」っと、言われて以来仲がが

良い。

「全員集合」

「ハイ！」

班長の図太い声が響く。騒音だらけの中で一際大きい。便利な声だけど、怒れば最悪だ。

取り囲むように集まり朝礼が始まる。

「えーと、本日の休出出勤協力に感謝します。今日は、三カ月に一回の一斉点検と清掃です。ライン外作業、通常じゃないからと言って不真面目に作業に従事しないように。

あと、幸一君。毎度の事でイライラすると思うが、君が手伝いに来た場所の上司が全て任されているから、容赦しないからな」

何もしてないのに、目を付けたと言われ方した。隣で山中さんが「ご愁傷さま」と笑いを堪えながら言う。

「山中も例外じゃないから、気、付けろよ」

「・・・・・・ヘイ」

自慢の長身が数センチ縮む。

「朝礼終了。

安全具確認！

山中、言え！」

縮んでいた山中さんだが、班長の声で背筋ピンっと伸びあがり勢いで前に出て班長と並ぶ。

「全員円陣組め！」

大きな声と同時に一斉に皆動きだし、円を描き、班長と山中さんを上にして始まる。

「軍手着用！　ヨシッ！」

「ヨシッ！」

左手に着用している軍手を右手で指さし全員で自分以外の人にも指す。

「安全靴着用！　ヨシッ！」

「ヨシッ！」
今度は右手で自分が履いている安全靴コト、鉄靴（つま先骨折を防ぐ為に鉄板を付けた靴）を右手で指さす。そして、他の人にも指す。
最後に班長が言う。
「全員安全具装着確認！」
それに全員、右手を上にあげ――。
「ヨシッ！」
と、言い。全員各持場へと解散した。

「幸一。山中と行け。今日は地下ライン清掃だ良いな」

全員が解散したのを班長と二人で確認してから言われた。
が、いきなりすぎてちゃんとした返事は出来なかった。
「は、ハイ。今から追いかけます」

走ろうとするが、
「走る厳禁！」
班長の大声が響く。
久しぶりだったから禁止事項忘れていた。
一旦足を止め、振り返り班長に一礼して、今度は歩いて追いかける。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1723n/

歩行者

2011年8月1日03時33分発行